
婚活シンдрームorz

ナオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

婚活シンドロームorz

【Nコード】

N9098Z

【作者名】

ナオ

【あらすじ】

恋愛小説編集者・森口千絵里は、崖っぷちの婚活中。

結婚相談所で知り合った相手は、みんなひと癖あるツワモノで……。オトナ女子のリアルタッチ(?)ラブコメディ！

この作品は、『小説サイトBerry's Cafe』で、先行連載中です。

Prologue

誰の人生にも、必ず一度はモテ期があるという。
わたしにも、光り輝く瞬間があった。

同時に3人のモテ男からプロポーズされたのだ。

誰もが振り返るほど綺麗な顔をした、モデルのジュン。
とびきり頭がよくて上品な、医者志望のトモヤ。
ワイルド&セクシーな、有名タレント二世のショウ。

3人は、わたしにグイと詰めより、真剣な表情でこう聞いた。

「僕たちの誰と結婚したい？ チェリー」

わたしはちょっと首をかしげ、しばらくしてからこう答えた。

「誰ともしない。だって、ふこうへいになるもん」

……戻りたい。
切実に戻りたい。

あの日あの時、さくら幼稚園の年中組に。

森口千絵里、29歳と11ヶ月。

職業・恋愛小説編集者。

現実・セカンドバージンまっしぐら。

崖っぷちの婚活中でございます……。

01:ウェディング・シュガー・ケーキ

顔を上げると、そこには愛らしいバースデーケーキがあった。

柔らかな白いクリームをまとい、キラキラ光るヴェールのようなシュガーと、はにかんで頬を染めたイチゴが4個乗っかっている、花嫁のようなケーキだ。

板チョコのメッセージボードに

「Happy Birthday Chierisan!」

と書いてある。

わたしは机の上の無粋なノートパソコンを端に押しやり、その可憐な物体を見つめた。

「これ、どうしたの?」

机の横に立っていた新入社員のマリエちゃんが、ニコニコして言った。

ショップ店員かと思まごうヒラヒラファッションと、女の子らしいメイクのマリエちゃん。

「お誕生日ですう」

「誕生日……。わたしの?」

「はい。おめでとうございます! 今年入社の同期、3人で買いました!。ロウソク、つけます? それとも、おうちで?」

マリエちゃんが、綺麗にジェルネイルした爪でケーキを指さした。爪の先には、ピンクの小さなリボンがついている。

クルクルとらせんを描いたキャンディみたいな口ウソクは、3本。

「……」

「あ、数が全然足りませんよねっ？　けど、ここのケーキ屋さん、ローソクは20本までしかサービスしてくれないんです。だから、3本にしてみました！。30歳の3……」

「ありがとう！　すっごく嬉しい！」

わたしはオトナの余裕を笑顔でしめすべく、思い切り目を細めて口角を引き上げた。

実際は鬼気迫る表情だったかもしれないが、怒鳴り出さないだけマシというものだ。

「30本もびつしりローソク刺したら、ケーキが見えなくなっちゃうもんねー。はっはっははは」

「そうなんですよ！　大先輩の千絵里さんに喜んでもらえて嬉しいです！　今夜はおうちで彼氏サンと盛り上がってくださいネー。って、あれ？　先輩、彼氏は……」

「いるいる！　向井理に激似のエア彼氏」

「あはは。千絵里さんって面白い」

マリエちゃんがふわふわと席から離れていった後、隣の席の立川弓子がわたしの横腹を軽くつついて言った。

「笑顔が張り付いたままだよ、千絵里。はい、深呼吸。吸ってー。吐いてー」

弓子はわたしの同僚だ。

入社時の配属先は違っていたが、WEB小説編集部に配属されたのは同時期だ。

「私達だって、若い頃はああだったのよ。屈託無くて、残酷でさ」

わたしは大きく息を吸って、了解の印にぐるりと目を回し、それから深いため息をついた。

「わかってる。ただ、誕生日は来月なのにつて思っただけ。マリエちゃんはセンスのいい仕事をするし、ここのケーキは好きだし」

わたしはそこまで言うと、なんだか急に脱力してしまい、椅子の背にグツタリともたれかかった。

夕方の社内。

仕事を終えて帰宅してする、他部署社員の姿がぼんやりと目に映る。

都内某区にあるうちの会社は、若い女性に向けた情報誌を多く発行していて、わたしの机はフロアーの隅にあるWEB書籍編集部にある。

編集長含めて6人の、小さな部署。

甘くて夢一杯の恋愛小説を担当してから、もう7年経った。
あっという間の7年。

その間に、わたしは仕事の楽しさと達成感を知り、すっかり打たれ強くなってお酒にも強くなり、気が付くと編集部最年長女子になっていた。

「お前は俺がいなくてもひとりで生きていけるよな」と、アイツに言われたのはいつだっけ。

小さな頃、わたしをお姫様みたいに守ってくれたナイトのような男の子達は、今どうしているんだろう。

「……こんなハズじゃなかったのになあ」

つい、弱音が口について出る。

弓子が同情するように頷いた。

「私も同じだって。誕生日は、頼みもしないのに毎年来るし、いい男との出会いなんて全然無いし」

それから、机の上に広げた、超ホットな恋愛小説のゲラを、あきらめたように見つめる。

「イケメン上司とのめくるめくラブ・アフェアなんて、現実世界じゃありえんもんねえ」

わたし達は、思わず向かい合わせの席を見た。

木下編集長が、腕組みしたまま椅子に寄りかかり、ぐーぐー寝息を立てている。

今朝方まで書籍化候補の小説を読んでいたらしい。

本人曰く、貫徹3日目。

面白いから、マジックで少女漫画風の目をかいた紙をまぶたに貼

り付けておいたのだが、もう30分、そのままだ。

弓子が言った。

「まあ、私は結婚はもうこりこりなんだけどさ。娘がいれば、充分癒されるよ、子ども」

弓子は大学時代に結婚して、女の子をひとり産み、2年前に離婚した。

今では立派なシングル・マザーだ。

わたしは再度、ため息をつく。

「こりこりって言えるのは、経験してるからよ。未経験じゃ、それとも言えない。今のままじゃ、わたしは癒しの“子ども”にも、たどり着けないんだから」

手のひらをグッと握りしめる。

「結婚したい！ 彼氏が欲しい！ ううん、その前に出会いが欲しい」

「出会いねえ。私のアラサー独身友達は、“出会い”は死語。“素敵な出逢い”は、もはや都市伝説って言ってるよ。本気で老後の貯金始めた」

「やめてよーっ！ 指先程度のわずかな夢をむしり取らないでっ！」

「弟さんの友達はどうよ？ イケメンいないの？」

「弟は10歳年下だよ？」

「なおさらいいじゃない。年の差婚、流行だし。こないだ、アラサーグラドルが10歳年下の……」

「小枝みたいな身体に爆乳と可愛いお顔がついてたら、わたしにもそんな人生があったかもね。そんなことより、わたしは抱擁して欲しいの。この疲れた心と身体を同時にギュッと」

自分を両腕で抱きしめる。

……少し太ってしまったようだ。

由美子がほっそりした首を傾げ、言った。

「……じゃあ、あの“彼”は？ 一昨日、電話が来たんでしょ？」

弓子の言う“彼”とは、本山ケンジのことだ。

1年半前まで同棲していた、わたしの“元カレ”。

ケンジの顔を思い出し、わたしは動揺を隠すようにパソコンを起動した。

マウスを乱暴に動かしながら言う。

「彼女ができたんだって。てか、あれから二人目だけどね。結婚を視野に入れてるって言った。相手の子は、お嬢短大卒業したての20歳。わざわざ写真、メールで送ってきた。頼りげ無くて、きゃしゃで可愛い。アイツのタイプ」

つまり、わたしとは正反対の子ってことだ。

弓子が言葉に詰まってから、ああ、と、何とも言えない声を出した。

「なるほど。でも、わざわざそんな電話をしてくるなんて、あんたにまだ気がある証拠じゃないの？ ヤキモチ焼いて欲しいとかさ」

「ないない。タダの自慢。そういう、子どもっぽいところがあんの。お前はどうかって聞かれたから、今週末が初デートって答えてやった」

目の前のディスプレイに現れた、花びらみたいな白いウェディングドレス姿の花嫁。

アイツの花嫁になる子は、きっとこんなドレスが似合うんだろうな……。

弓子がディスプレイをのぞき込んで聞いてきた。

「これ、なんのサイト？」

「結婚相談所」

「入会するの？」

「したの」

「マジ!？」

「弓子が思ってる以上に、せっぱつまってるの、わたし。どうしても、早く結婚して幸せになりたい。少なくとも、ひとり寂しく誕生日を迎えるのは、今年で最後にするつもり」

できることなら、アイツより先に結婚したかった。
ほら、わたしだってあんたナシでも幸せなのと言ってやりたいのだ。

その時、目の前の木下編集長がのそりと身体を動かした。
指先でポリポリと掻いたまぶたから、紙の目玉がハラリと床に落ちる。

「んー。おい、森口ー。今後の仕事の計画表、出しとけよ。来年と再来年分もだ」

「おはようございます。編集長。お言葉ですが」

わたしはキツと顔を上げて言った。

「来年の予定はまだ立てられません。結婚する可能性大ですし。すぐに子ども生みたいしですし！」

編集長がわたしの顔をしばらく見て、やれやれと首を振った。
それ以上、コメントしないのがかえって憎らしい。

「原稿は？」

「後輩分含めてチェックすべて終わりました。ちなみに、今週分はすべて仕事を終わらせました。さてもう7時ですし、わたしはこれで退社させていただきます」

早口で言いながら、バッグの中に仕事の資料を詰め込む。
愛読している江國香織の最新刊もだ。

「今夜はこれから結婚相談所主催の『夜の読書会』があるんです」

「ヨルの読書会？　なんだそれはエロいのか」

「落ち着いたレストランで食事を楽しんだ後、持ち寄った本の感想を話ながら交流を深めるという会ですよ。知的でスペックの高い相手が見つかるって、相談所のおばさんが」

片眉を上げて聞いていた編集長が、また「ふうん」と言った。
ニヤニヤ笑い付き。

「どうぞ、好きなだけニヤついてください。わたし、本気なんです。本気で婚カツするつもりなんですから！」

わたしは椅子から立ち上がってそう宣言すると、ケーキを元通り箱につめ、グッチのショルダーバッグをつかんだ。

「絶対、近々相手を決めてみせます！　では」

新入社員の女の子達が、驚きに目を丸くしてわたしを見ている。

新しいパンプスの靴底をカツカツと鳴らして編集部から出た。

ドアを開けたとたん、ギャグマンガみたいにすべりそうになる。

「オウツと！」と、色気のカケラもない言葉が口をついて出た自分がもの悲しい。

靴の裏を確認すると、睫の長い紙の目玉が所在なさそうにくっついていた。

しかも、両足に一枚ずつ。

いつも、こんな感じの私だ。

カッコいいキャリアウーマンにもなれないし。

「読書会に退屈したら、役立ってよ」

わたしはそうつぶやくと、紙の目玉をバッグの中にそっと放り込んだ。

02：ウィンター・スノー・フェアリー

会社を出て、足早に駅へ向かう。

こんなに早く帰宅するのは久しぶりだ。

来月新しく立ち上げるWEBサイトのプロジェクトが難航していて、連日、会議続き。

期待している恋愛作家の新作の更正と、後輩の原稿チェック、出張と日替わりの打ち合わせ、etc, etc……。

帰宅はデフォルトで終電、休日は疲れて爆睡の日々では、出会いはなんてあるわけがない。

「あんたの結婚が決まるまでビール断ちするわよ」と実家の母にまで追い打ちをかけられて、藁にもすがる思いで結婚相談所の入会ボタンを押したのだ。

それにしても、今日はなんて寒さなんだろう。

まだ11月の半ばなのに、息が白く感じるほどだ。

「うー、寒い。真冬みたい」

わたしはストールをギュッとまき直してビル風を防ぎ、携帯で時間を確認した。

「ここから銀座まで15分。会場のレストランまで歩いて7分。大丈夫、余裕。いたら念入りに化粧直ししよう」

8時から、レストランで会食が始まるのだ。

結婚相談所のおばさんいわく、今回は、かなり条件のいい男性が集まるという。

そんな会食になんでわたしを混ぜてもらえたのか不思議だが、どうやら『出版社勤務：書籍編集』という仕事の肩書きがよかったらしい。

会費1万5000円は、給料前の財布には痛かったが、これで良縁にめぐり会えるなら安いものだと自分を納得させた。

それに、会場はOLの間で口コミ評価の高いイタリアンレストランだ。

美味しい食べ物と少量のアルコールがあれば、あとはなんとかなるだろう。

帰宅する人で溢れた改札をぐぐり抜け、バッグに携帯をしまおうとした時、メールの着信音が鳴った。

スランプで鬱になりかけの、超人気作家さんからだ。

すぐにメールを確認する。

『もうダメです。全然何も思い浮かびません（泣） 枯れたんです。きつと枯れたんです（涙） 森口さん、どうしようどうしようどうしよう（涙・涙・涙）』

「ほんとにナイーブなんだからなあ。えーっと、『大丈夫。やれるって。その設定は女子なら誰だってキュンとなるし、RIKAちゃんには読者さんを惹きつけるスゴイ才能があるんだからね！』」

送信ボタンを押したとたん、速攻で返信が来た。

『樹海に行ってもいいですか（涙）』

ああ、もう！

人数の少ない編集部で、大勢の書籍作家さん達をフォローするの

もわたし達の仕事だ。

大きな音を立てて電車が入ってきた。

階段を駆け下りながら、指を素早くスライドさせる。

『そんなこと言わないで。とにかく、期待してる！ 今度一緒にご飯でも食べよ？ 頑張つて！』

ディスプレイに集中しすぎて、足もとがすっかりおろそかになっていたが、それもわたしにはよくあることだ。

母からは、『落ち着きをどこかに落つこととして生まれてきた』と子どもの頃から言われている。

あつと思つた瞬間、わたしは足を踏み外し、ボブスレーみたいに階段をお尻で滑り落ちていた。

本日、二度目の転倒。

「痛つたた……」

みんながチラチラとこつちを見る視線も痛い。

構内に転がったバッグを、慌ててさがす。

財布も化粧ポーチも中から飛び出てしまい、恥ずかしいっとなかった。

当然のことながら、バスデーケーキも箱の中でぐちゃぐちゃだろつ。

普段はデニムにカッターシューズのわたしが、タイトスカートにヒールパンプスなんて、ムリめのおしゃれをしてきたせいだ。

ストッキングの派手な伝線を見つけて絶望したとたん、発車のベルが鳴り響く。

「待つて待つて！ あーっ！」

立ち上がって猛ダッシュし、閉じかけたドアに無理矢理身体をねじ込んだ。

ゼイゼイ息をつきながら車内に足を踏み出そうとしたら、誰かに引つ張られたように身体が動かない。

「ん？ ん？ あれ？」

その時、すぐ耳元で低く柔らかい声がした。

「はみ出てますよ」

「は？」

いったい、何を言ってるんだろう。

とまどって声の主を見上げると、わたしを間近から見下ろしている男性の顔がある。

わたしはちよつと赤くなった。

厳密に言うなら、ボーツとのぼせた。

なぜなら、その男性がすごく感じのいい顔立ちをしていて——つまり、わたし好みの端整なイケメンで——、しかも、微かにいい香りがしたからだ。

パンツにジャケット、それにラフなニットのマフラーも上質で、

この時間の混み合った電車内にいるのが不思議なくらいだ。

パンプスを履いたわたしよりこれだけ背が高いのだから、身長は180センチを楽に越えているだろう。

年齢はわたしと同じか、少し上くらいだろうか。

車窓に映るわたしの斜め後ろに、彼はなぜかごく近づいて立っていた。

少し遠慮がちに。わたしの背に重なるようにして。
その表情が、少し照れたように見えるのだ。

やだ。カワイイ。

思わず含み笑いを漏らしそうになり、慌てて腹筋に力を入れる。
大学時代から通学通勤含めて11年。

味気ないのがあたりまえの電車内で、こんなに美味しいシチュエ
ーションは初めてだ。

頭の中では、口に出せない妄想が渦巻いていた。

こんなに近づきたそうにしているんだもの。

もしかして、彼はわたしにビビッと来たのかもしれない。

運命の出会い……。

電車での接近から始まるラブ・アフエア。

妄想で溶けそうなたしにもう少し顔を寄せ、男性はもう一度低い声で言った。

「はみ出てますよ。あなたのバッグ」

「ありがとうございます。はみ出てるんですね……？ わたしのバ

ッグが？

言われるままに、車窓の下に視線を落とす。

ドアのすき間に挟まっているのは、バッグのショルダー部分だ。
肝心の本体は、すっかりドアの向こうに消えている。

「ウソ！」

まだローンも払い終えていないのに、情けなく折れ曲がったグッチの肩ひも。

ガックリと肩を落としたわたしに、男性が小さく咳払いして申し訳なさそうに言い添えた。

「それから、破れてます。あなたのスカート」

「えっ!？」

慌ててお尻に触れてみる。

「きゃっ」

今度は本当に真っ赤になった。

スカートが、真ん中から見事に破れている。

確かにムリしてワンサイズ小さなタイトを買ったのだ。

だって、その方がスタイルよく見えるってショップの店員さんに勧められたから。

わたしのバッグは、次の駅までドアの向こうにある。

男性は、身動きのできないわたしのために、すぐ後ろに立ってくれたのだ。

「す、すみません……」

塾帰りの小学生が、わたしのお尻を見てクスクス笑っている。慌ててドアに背中をつけ、あまりの恥ずかしさでうつむいた。もう、最悪。

11年に一度という素敵男子の前で、なんたる失態。

これだから、恋愛とも縁遠いんだろうな

よく見れば、新しいパンプスも傷だらけ。
もう、踏んだり蹴ったりだ。

この破れたスカートでは、会食どころか歩行もできない。
いったい、どうしたらいいんだろう。

男性が、気遣うように言った。

「よかつたら、これを使ってください」

首に巻いていたマフラーを外してわたしに差し出す。

「広げて腰に巻けば、スカートは見えなくなりますよ。ちょっと変
だけど、ガマンして」

恥ずかしさと気落ちで頂垂れたままのわたしの腰に、長いマフラーを巻いてくれた。

照れもせず、まるで小さな子どもにそつするように、あっさりと、
手際よく。

「あ、ありがとうございます……。でも、このマフラー、どうやって
お返ししたら」

「気にしないでください。あげますよ」

「でも」

男性は、ようやく顔をあげたわたしに優しく言った。

「では、物々交換で。あなたがお持ちのその眼鏡とではどうですか

？」

眼鏡？

自分の胸ポケットに、ふざけたおもちゃの眼鏡が刺さったままだったことによく気が付いた。

年若い作家さんが今日編集部に遊びに来て、わたしに冗談でこれをくれたのだ。

プラスチックの黒縁メガネの中に、目つきの悪い目がペイントされているお笑いグッズだ。

「けどこれ、おもちゃですよ？ 高価なマフラーとは」

男性が大真面目に答えた。

「どうも、これが必要な気がするんですよ。今晚、退屈な会に出なくてはならないので。だから、よかったらこれを」

「いいんですか？」

「もちろん。こちらこそ、助かります。ところで、あなたはどちらまで？」

「銀座で食事の予定だったんですけど、降りて家に戻ります。この格好じゃあ、もうどうしようもないですし」

「そうですか。食事ができないのは残念ですね。今度は足もとに気をつけて」

電車が駅に着き、男性はわたしを元気づけるように微笑むと、人混みの中に消えていった。

WEB小説風に言うのなら、素敵なナイトか王子様。

WEB小説風でないところは、出会いも別れも一瞬だったということだ。

現実 is 厳しい。

わたしも電車を降りて、とぼとぼと駅構内を歩き出した。

「お腹すいたな。イタリアン、楽しみにしてたのに。会食もキャンセルだ。当然会費は戻らないんだろっなあ……」

この日のために気合いを入れて仕事を終わらせ、新調したスーツとパンプスで意気揚々と出かけてきた自分が惨めだった。

婚活するまえに惨敗だなんて、さすがにわたしくらいのものだらう。

バッグの中で、携帯が鳴っている。

ぼんやりしたまま受け取って耳に当て、それがケンジからだを知ってパツチリ目が覚めた。

雑踏に彼の声がかき消されないよう、携帯を強く耳に当てる。

別れてからもわたしの心を振り回す男が、あっけらかんとした口調でこう言った。

『なあ。俺、結婚、決まったよ。来年の3月に、カナダで式をあげる。お前、二次会出てくれるだろ？ こっちでやるからさ』

「おめでとう！ 出るよ、もちろん。カナダかあ。羨ましいーい！」

これが、わたしだ。

意地っ張りで、弱みを見せるのがキライで、いつだって素直になれないわたし。

ほんとうは突っ伏して泣きたいほどショックなのに、わたしは電話の向こうのケンジに満面の笑顔を向けていた。

「最高じゃん。よかったね。彼女、幸せにしてあげるんだよ、ケンジ。あんたはほんつとうに手がかかるんだから」

電話をいつ切ったかわからなかった。

沸き上がる涙を懸命に飲み込んで、足早に歩く。

カナダは、わたしとケンジが初めて2人で出かけた海外旅行先だった。

スノーボードが巻き上げる、白銀の雪。

知らずに銀座の街に出て、華やかな夜のライトを見上げていた。

シヨウウィンドウの中も、もう雪景色だ。

妖精みたいなパーティードレスを着たマネキンが、きらめく星のスティックを持って、雪の結晶の上で笑んでいる。

彼女は、きつとたくさんの女の子に、ウィンター・ラブの魔法をかけてあげるんだろう。

バースデーケーキの箱を抱えてガラスに映る色とりどりの光を眺めていたら、ひとりぼっちのマンションへ帰るのが嫌になった。

洋服を着替えて、レストランに出かけようか。

誰か、見知らぬ人とたわいのない話をして、落ち着いた場所で暖かい食事を取って。

それが今、自分に与えることのできる唯一の元気薬のように思えた。

「よし。ちょっと遅刻しちゃうけどそうしよう。そうと決めたら、即実行！」

わたしはマネキンに向かってつぶやくと、セレクトショップの
エントランスをくぐった。

03：リング・リング・マイ・ベル

なんとか、8時を少し回った程度で会場へたどり着いた。

銀座の大通りに面した入り口から、せまい木の階段を駆け上る。今度は走っても大丈夫。

ショップで、全身私らしい服装に着替えてきたからだ。

ロールアップしたデニムと、ラウンドネックのシンプルな白いブラウス。

細いゴールドのトリミングがきいた黒のニットジャケットは、前を開けるとちよつとシャネル風に見えて華やかだ。

足もとは、アニマルプリントが可愛いハラコバレエシューズ。

平たく言えば、通勤にそのままつかえる“いつも”服とも言える。洋服の着回しは、なにかと出費の多いひとり暮らしの女子にとって、死活問題なのだ。

どちらにせよ、このレストランは銀座にしてはカジュアルで、気軽な女子会が多いという口コミだ。

案内状でもドレスコードはなかったはず。

緩くウェーブのあるセミロングの髪を指でおおざっぱに梳かし、鏡ナシで塗ったグロスを、唇で適当にのばす。

着替えるのに精一杯で、念入りの化粧直しをしている時間はこれっぽっちもなかった。

それでも、一度くらいは鏡で顔を確認したほうがいいかと、階段を上りながらバッグの中をかき回す。

「えーと。化粧ポーチ化粧ポーチ」

確かに、足もとも頭上もおそろそかにしていた。

二度も転倒していながら、懲りないヤツだと自分でも思う。
だが、レストランの階段から男が降ってくるなんて、大抵の人は
考えないだろう。

「だっだっだっ……！」

その男は、猛スピードで階段を後ずさってきた。

気配に気づいて顔を上げたわたしに、男の痩せた背中がドンとぶ
つかる。

「きゃっ！」

何が起こったのかわからないまま、せまい階段の両側に両腕を突っ
張った。

プルプル震える腕で、階段から転げ落ちまいと必死に持ちこたえ
る。

「ちよっ……！　しっかりしてください！　落っこちちゃう！」

「すすすすすみすみ」

緑のジャケットを着た小柄な男が、パニック状態でわたしにしが
みついている。

「すみませせせせ……」

うわずって消え入りそうな声。

「謝らなくていいから自分で立ってくださいってば！」

思わず怒鳴ると、男はようやくわたしから離れ、細い肩を振るわせて、寄せ木細工の壁にもたれかかった。
ハアッハアッと荒い息をついている。

「ちょっと、大丈夫ですか？ 気分でも悪いんですか？」

わたしは体制を立て直して男に聞いた。
わたしの方が一段低い位置にいるのに、男の顔とほとんどまっすぐに向き合っている。

7、3分けでピツタリ撫でつけた髪と、毛筆でちょこつと描きそえたような目鼻。

青ざめた顔には、汗が噴き出している。

「誰か人を呼びましょうか？ それとも救急車？」

男は、すぐりつくような目でわたしを見て言った。

「チツチ……」

「は？」

「チツチ……」

今にも泣き出しそうに震える唇。

大丈夫なんだろうか、このひと。
頭のネジが今のショックで落つこちたのかも。

わたしは、男の言葉から連想される幼児語をふまえて言った。

「トイレなら、外に出るよりレストランに入った方が近いですよ」

男がプルプルと首を振る。
どうやら違うらしい。

「ちつちつ……遅刻してし、し、しまつて……」

「遅刻？」

男が怖々と階段の上のドアを見上げた。

「あつあつあそこに。はつはつ8時までに入らなくちゃいけなかったのに。僕、幼稚園のお遊戯会の時からいままでいついっ一度も遅刻したことなんかなくて、だから」

嫌な予感がする。

わたしは微かに目を細め、男に聞いた。

「もしかして、パーフェクト・マリアージュさんの読書会にいらしたんですか？」

男が青ざめたままの顔で頷いた。

わたしと言葉を交わして少し気が楽になったのか、突然、猛烈な勢いでしゃべり出す。

「で、電車ですごい飛び込み自殺があつたんです。ひと駅目でひとり。2つ駅を通過したところでまたひとり。き、今日はみんながなんでか死にたい日なんです。それでダッダッダイヤが大幅に乱れて

二度あることは三度あるって言うから、また飛び込みがあるかって心配してたら緊張しちゃうって駅を乗り過ごしてまた戻ってきたんですけど今度は迷子になっちゃった。

銀座つてはじめてなんです。あそこの角にあった香水臭い黒いガラスのお店は寒空の中でムキムキした男の人が上半身真っ裸で踊ってましたこれが銀座なんですか？

やっぱり、言われたとおり車で送ってもらえばよかった。でも、女性と会食するのにおうちのひとに送ってもらうなんて男らしくないでしょ？ だから僕」

「……」

現実の厳しさにめまいが起きそうだ。

ママと一緒に来れば良かったのにねといいかけた言葉をグツと飲み込み、わたしは時計を確認しながら男に言った。

「まだ、5分過ぎただけですよ。わたしもその会に出ようと今来たところです。さ、大丈夫ですから中に入りましょう」

「ほっほっ？」

「ほんとですよ。わたしは行きます。ここの料理は美味しいらしいし。ワタリガニの Pasta が絶品なんですって」

壁にピッタリと張り付いたままの男を横目に、階段を上る。

真鍮のドアノブに手をかけると、男がチヨコチヨコと階段を上ってくる音が聞こえた。

親ガモの後を必死で追う小ガモのイメージが脳裏を過ぎったが、もうこれ以上は考えまい。

レストランのエントランスをくぐると、白いシャツ姿のウェイトーがにこやかに近づいてきて、「森口さま。お席はあちらです」と言った。

結婚相談所のおばさんが、わたしを見て、ちよつとイラついた顔をしている。

遅刻はやっぱりまずかった。

手前の一般席は満席。

お洒落で木のぬくもりが暖かい店内は、まるでどこかのモダンな邸宅にいるようだ。

果物が浮かんだお酒の瓶が飾られ、お腹が鳴り出してしまいそうなほどいい匂いが漂っている。

ガラスで仕切られた特別席が今回の会場になっているらしく、手前の二席を残して全員が着席していた。

男性が4人。女性が4人。プラス、おばさん。

わたしと緑ジャケットのボクを入れて、全員で10人の出席者だ。

男性陣にサツと目を走らせ、心の中で安堵のため息をつく。

ガン見するわけにはいかないからなんとなくだが、みんなまともそうだ。

よかった。少なくとも外見はマザコンに見えない。

「遅れちゃってすみません」

頭を下げた謝りながら、ウェイターが引いてくれた椅子に座る。

「ちよつと思わぬアクシデントが……」

そう言いかけると、わたしの背中に隠れるようにしていた“ボクちゃん”が、ひよいと顔を出して言った。

「そうなんです。電車ですごい飛び込み自……」

わたしは遮るように、ゴホンと咳払いした。

“ボクちゃん”が恥ずかしそうに、またわたしの後ろに隠れる。
やめてよ、もう。まるで、わたしと何か特別な関係があるみたいじゃない！

カジュアルとはいえ、ここはお見合いの席なんだってば！

「その席に座られたらいかがです？」

わたしはこめかみをヒクつかせながら、前の席を指さして言った。
この男と真向かいの席なんてガツカリだ。

他の4人はもつと普通そうなのに。

髪をいかにもOしっぱく縦巻きにした女が、ひとつ向こうの席からわたしを見つめ、ピンクの唇に上品な笑みを浮かべて言った。

「あら、素敵。おふたりはもう、親しいお知り合いなんですね？」

他の3人の女も同調したようにうふふと可愛らしく笑う。

なにこれ、嫌み？

まるで、わたしの相手はもう決まっていると言わんばかりだ。

いくら結婚相手を探す会だからって、こんなにライバル心をむき出しにするものなの？

だが、すぐにその理由がわかった。

視線を感じて顔を上げる。

向かい側席の、一番奥。

壁際に座った男性が、ちょっと驚いた顔でわたしを見ている。

「あっ！」

座っていた椅子から、思わず腰を浮かした。

電車であつたあのひとだ……！

なんて偶然！　ア―ンド・超~~~~ラッキー――！

わたしの脳内で、薔薇の花びらが舞い、にぎやかに祝福のベルが鳴る。

これはきつと恋愛小説の神様の、粋な計らいだ。

多忙な編集人生に性別を吸い取られそうになっていたわたしに、最高の出会いをくれたのだ！

「さつきはありがとうございました！」

すっかり浮かれて、不抜けた笑顔を浮かべてしまう。

だって、これ以上の展開がある？

彼は、間違いなくイケメンだった。

優しげに整った顔立ち。

スラリと男らしいスタイル。

センスある洋服の着こなしと品のある物腰。

頭のでっぺんから足の先まで、完璧な素敵男子だ。

わたしは、銀座線の王子様をうっとり見つめた。

まるであの方の頭上にだけ、スポットライトが当たっているみたい。

もう、エア向井理を夜のお供になんかしない。

彼はわたしと視線を合わせ、ニツコリと魅力的な笑顔を向けてくれた。

どうやら、この状況を面白がっているみたいだった。

「またお会いしましたね」

それから、形のいい唇に親しげな微笑を浮かべる。
うーん。セクシー。

「着替えたんですか？ 食事に間に合ってよかった」

女子全員が、わたしに話しかける彼を食い入るようにつめていた。

彼の一言一言を、何一つ聞き逃すまいとするように。
それから、バツとわたしを振り返る。

全員の目が細くなっていた。

なんて鋭い視線。

思わず、タジタジとなる。

巻髪女がギリリと齒ぎしりをした。

なによ、アンタ？ と言わんばかりに吊り上がった細い肩。

その瞬間、わたしはハッキリ知ったのだ。

……ここは戦場だ！

04：ダンス・イン・ザ・ミルキーウェイ（1）

一触即発な雰囲気の中、最初の料理が運ばれてきた。

「ジャンボマッシュルームのポタージュスープ、トリュフ風味でございます」

ウェイターが手際よく目の前にお皿を並べていく。

中央だけ深くくぼんだ、白いお洒落なスープ皿。

濃厚なスープから、茸の香りがする。

「ああ……。美味しそう」

女性陣から睨まれているのも忘れ、大喜びでつぶやいてしまった。
「はち切れそうな胸に「室田ます子」とネームプレートをつけた、
丸顔の結婚相談所のおばさんが、笑顔を浮かべて言う。

「お腹、すきましたか？」

「はい。ものすごく！ グーグー鳴っちゃってます。お腹」

「まああ。森口さんはとても健康的ですね！ 女性の美しさは健康からといますしね」

ま。上手につないでくれるじゃないの、ます子さん。
わたしは「見かけ通り、健康だけが取り柄なんです」と、いつも
のジョークで答える。

たいていの場合、ここでちょっとした笑いがとれるのだ。

だが、男性陣は硬い表情を崩さない。
につこりと微笑んだのはあの彼ひとりだ。

「僕も同じですよ。さっきからお腹が鳴ってます」

彼におもねるように、「ほんとですねぇ」「美味しそう」と女性陣が笑う。

彼女たちはみんな、スープのことなど眼中にないようだった。そりやもちろん、わたしだって素敵男子には大いに胸がときめくが、とりあえず何か口にいけないと空腹で倒れそうだ。

今日は打ち合わせの時間を避けて、早い時間にカップヌードルを編集部の机ですすただけだし、時間がなくて慌てたり、通りを全力疾走したりして、喉もカラカラだ。

冷たいビールを一気飲みしたら美味しいだろうなあと頭に浮かんだタイミングで、ウェイターに「お飲み物はいかがなさいますか」と聞かれてしまった。

反射的に「生中」と答えてしまったのはしかたがない。

「グラスビールしかございませんが、よろしいですか？」と、ウェイター。

そっか、こじやれたイタリアンレストランに来てたんだった。わたし以外のみんなは、上品にワインを頼んだのだと気が付いた。

「あ。みなさんワインですか？　ついつい、会社帰りの居酒屋と同じ注文をしてしまって」

あはははと笑いながらそう言ったものの、衰しいくらい、冷たいムード。

巻き髪女がバカにしたようにクスリと笑う。

「居酒屋、常連なんですか？　何か美味しいメニューでも？」

む？ 言い方に、カチンときた。
そうだよ、悪い？

昔から、どうにもこのタイプの女が苦手なのだ。

ひらひらとしたパステルカラーの衣装に隠れて、チクチクと針を刺す。

「ええ。忙しい仕事帰りのビールは最高です。居酒屋の料理は特に美味しくもないし、とくに安くもないんですけど、よく行っちゃいます。いつも変わらずそこにあつて、わたしが帰る遅い時間に明かりが点いてて、黙々と仕事しているガンコなおじさんを見ると、なんだかホツとするんです」

売り言葉に買い言葉で、つい本音を言ってしまった。

オヤジ女子、全開。トホホ。

挑発に釣られた自分が情けなくて、意気消沈してしまう。

その時、目の前の席に座った緑ジャケットのボクが、まるで学校の教室で発言するようにシュツと右手をあげた。

「はいっ！ ぼ、ぼ、僕もビールをくださいっ！ ビールってすごく美味しいですからっ！ が、が、頑張つて、一生懸命働いたひとには、特に！」

あれ？ わたしをかばってくれてるんだろうか。

ボクちゃんは、顔を真っ赤にして、テーブルの上で手をグツと握りしめている。

「あのっ。あのっ。そうだ、ビールはワインよりアルコール濃度が低いんですよっ？ 僕、アルコールに滅法弱いんです。幼稚園の

時、おばあちゃんが作った3年ものの梅酒を、ジュースだと思って大きな瓶に半分も飲み干してしまつて。

だって、果物みたいな花みたいなのつとりする甘い香りがしてたんです。そのまんま、どうしてか押し入れの中の布団に潜り込んで寝ちゃったんですよ。

気が付いたときにはすつごく時間が経つて、家の中が大騒ぎで、僕、押し入れから顔を出せなくなって、いつ出たらいいのかなーなんて考えてたらそのままたぐつすり寝ちゃつて。

トイレに行きたくて目が覚めたら今度はお巡りさんまで来てて家の外からサイレンの音がするし誘拐がどうのつて大きな声が聞こえてふすまから覗いたら警察犬が僕の靴下の匂いをかがされて困ってるしほんともうどうしたらいいかってそれが最初の酔っぱらい事件で次は小学校6年生の時にお祖母ちゃんの「

彼はどうやら、しゃべり出すと、息を継ぐタイミングも話し終えるタイミングも掴めなくなるらしい。

みんなが、あっけに取られて見つめている。

ます子おばさんが、ブレスなしでしゃべりまくる彼を、慌てて遮った。

「いろいろと大変なご経験をなさってるんですね、市村さん」

おばさんにおしゃべりを止めてもらつてホッとしたのか、ボクちゃんこと市村くんが、ふーっと安堵のため息をついた。

むしろ、話すことが苦手なのかもしれない。

だから、緊張で支離滅裂になっちゃうのかも。

だが、そのおかげでわたしはみんなの視線から解放された。

ちよつと……いや、だいぶ変わってるけど、悪いひとではないんだろつ。

ます子おばさんが軽く手を叩く。

「さあさあ。食事を始めましょうか。みなさん、もつと肩の力を抜いていただいて、気軽に会話も楽しみましょう」

ようやく、食事が解禁になり、次々と料理が運ばれてくる。

白身魚のカルパチョや生ハムのカプレーゼサラダが美しく盛り合わされた前菜のプレート。

「アルコールが苦手なら、ムリしなくてもソフトドリンクがありますよ？」

わたしがそう言うと、市村くんが赤くなって「や。ビ、ビ、ビールにはずっとチャレンジしてみたかったです。いい機会ですっ」と言った。

こうしてあらためて見ると、ずいぶん若そうだ。

華奢な顎と、これっぽっちも存在を主張しない控えめなパーツの小作りな顔。

羨ましいほど、白くて滑らかな肌をしている。

せいぜい大学生くらいにしか見えないのに、なんでアラサーに混じって婚活なんかしてるんだらう。

ます子おばさんが、みんなを見渡して、場を取りなすように言った。

「お料理を食べながら、皆さんがお持ちになった本の話进行しましょう。関口さんが今日お持ちになった御本は、ちょうどお料理を題材としているようですね？」

さすが、進行のプロだ。

「そおーなんですう」

関口さんと呼ばれたフワフワ巻き毛の女子が、鼻にかかった甘い声で得意げに答える。

「えっとこれは。赤いバラ……」

そこで一度つかえ、本のタイトルをチラ見しながら続ける。

「赤い薔薇ソースの伝説と言ってえ。えーと。すえ。すえ。コホン。
“末娘は結婚しないで母親の世話を一生しなければならぬという、
20世紀初めのメキシコ革命時代当時の封建的な家族制度のもと……”」

そこで、ポツカリ次の言葉を忘れたらしい。

関口さんは手元にあったメモ帳をじっと見つめていたが、すぐにめんどくさそうに隅に押しやった。

「ともかく、自分の好きな男が、姉さんと結婚しちゃうらしい……
いえ、してしまふんです。それで、主人公のティナ……だっけ……
は、せつせと料理をつくるんです」

「どっとうして料理を作るんですか？ ティナさんはどんな心境だったんですか？」

興味深そうに質問したのは市村くんだ。

関口さんを見つめて、真剣に聞いている。

「えっ？ それは」

関口さんが口ごもる。

眉間にピツと縦皺が寄った。

めんどくさいこと聞かないでよ、と言う表情。

「心境つて。さあ。作りたいからじゃないですかね。たぶん。ていうか。奥深い物語なんですよ」

そこまでなんとか言い終えると、今度は斜めから見上げるように可愛らしい笑顔を見せる。

「わたし、お料理が得意なのでこのお話にはすっごく感動しましたー！」

「まあ、関口さんはお料理が得意なんですね？」

ます子おばさんが口調を合わせる。

関口さんがうふふと笑った。

「はい。そりゃあもう。一見、デパートのお総菜に見えるって言われます。もちろん、お総菜を買ったことなんてありませんけどっ！」

その時、関口さんの前に座っていた壁際の彼が、のんびりした口調で言った。

「その小説は、僕もとても好きな一冊です」

くったくない笑顔だ。

関口さんの目が、獲物を捕らえたようにキラリと光る。

「まあ、偶然！ 同じ本が好きだなんて。きっと気も合いそう……
なんて。やん」

「奥宮さんも読書は好きなんですね？」と、笑顔全開のます子お
ばさんがあいの手を入れた。

素敵男子は、年齢問わず女子の表情筋を緩ませる。

「それほど読書家ではありませんよ。ただ、たまたま好きな小説だ
ったものですから。というか、食いしん坊なので、月ごとに変わる
エキゾチックなレシピのついたこの本に惹かれたんだと思います」

奥宮さんって名前なんだ。

ああ、やっぱりいいなあ。落ち着いた話し方も素敵。

ボーッと見ているわたしに気づいて、奥宮さんがクスツと笑う。

「特に、3月の、薔薇の花びらをあしらった鶉が、官能的で忘れら
れません。関口さんは何月の料理が好きですか？」

とつさに質問を振られ、関口さんの耳が赤くなった。

「え？ えーと。ご、5月の……連休の宅配ピザ……とか？」

巻き髪が、プツとこれ見よがしに吹き出した。

「関口さんのお読みになったのは、名作のパロディ本かしら」

キツとなった関口さんを尻目に、巻き髪は自分のバッグから優雅
な手つきで単行本を取り出した。

「本はよく読むんです。今日は、昨夜読み終えた小説を持ってきま

した。江國香織さんの……」

思わず、「えっ」と声が出た。

彼女が手にしているのは、わたしが用意した本と全く同じだったからだ。

「この作家さんがなぜ好きなのかというと、まず、女性らしいみずみずしい感性に共感するからです。美しい言葉と透明感溢れる文体に身をまかせていると、時間が経つのも忘れて物語の世界を漂ってしまいます。特にこのお話の主人公は……」

悔しいが、書評は完璧だった。おまけに、外見は上品なOL読者モデルみたい。メイクもうまいし、センスもいい。本の選び方も絶妙だ。

つまり、男が好んでデートしたがるタイプ。

壁際の彼が、微笑して巻き髪に話しかけている。

彼女が話した内容が気に入ったらしい。

本の内容で話が弾み始めた2人を、女子達がスツと目を細めて見ている。

巻き髪、1ポイント先制。

わたしは、ワタリガニのパスタを黙々と口に運びながら考えた。

同じ本を題材に、巻き髪以上に気の利いた書評ができるだろうか。

この本なら、わたしでも女性らしさをバッチリアピールできると思ったのになあ。

……にしても、なんて美味しいんだろう、このパスタ。

濃厚な赤いソースがタリオリーニに絡んで絶品だ。

こんな難しい宿題のことなんか考えずに、もっと気軽に楽しめたかったな。

これが自分だとしみじみ思うのだが、わたしは、こんな時でも料理をしつかり味わっていた。

この際ビールも飲み干してお代わりしてしまえ。誰もわたしのことなんか気にしてないし……ん？

グラスを一気に傾けたとたん、奥宮さんと目が合った。

わたしを見て、ニコニコしている。

「森口さんは、ほんとうに美味しそうに食べますね。見ている方で気持ちよくなります」

その言葉と視線に好意を感じて、ちょっと赤くなってしまった。これって自惚れ？

わたしは慌ててビールのグラスをテーブルに置いた。

「は、はい。食べることに、すごく好きなんです。好き嫌いが何もなくて幸せだと思ってます。奥宮さんもさっき食いしん坊っておっしゃってましたね？」

「その通りです。食わず嫌いをしない主義で、どうせなら楽しんで食べようと思いますね。なんだって、食べてみなけりゃわかりませんから」

彼は、大らかな笑顔を浮かべた。

「食は、生命や文化とも大きく関わってくるでしょう？ 世界のさまざまな土地で、いろんな食べ物にトライしました」

“世界”というキーワードに、敏感に反応した女子達が、奥宮さんをうつとりと見つめた。

そりゃそうだ。女子なら誰だって、世界中を旅行できる余裕と財

力のある男子には憧れる。

わたしの隣りに座ったワインカラーワンピースの女子が、テーブルに身を乗りだして聞いた。

「奥宮さんは世界中を旅行されたんですか？　一番好きな国はどこですか？　パリ？　ニューヨーク？」

「いや。僕向かう先は主に」

「ハイツ！」

そこでまた手を挙げたのは市村くんだ。
ワンピース女子が、話題に水を差されてチツと舌打ちする。

「ぼ、僕っ！　僕も好き嫌い、ありません！　小さいときは好き嫌いばかりだったんですけど、それじゃあだめだってお祖母ちゃんに言われて、頑張ったんです。あ、あ、アレは僕が小学校5年生の時ですけど、ホームステイでオーストラリアに行って、その時に」

もうその話題は終わってるんだよ、市村くん。

そして君は、ママっ子じゃなくてお祖母ちゃん子だったのか。

ため息について、蟹ミソたっぷりのタリオーニを口に入れる。

どうせこのひとの話は長いんだし。

案の定、市村くんは白い頬を染めて熱弁を振るっている。

「アボリジニの村に連れていってもらったんです。そこでまるまるとした芋虫を食べてごろんと、生と焼いたのを進められて。僕好き嫌いがいっぱいあるんですと泣いて断ったんですけど結局食べることになって」

ほぼ全員の食事の手が止まり、顔が引きつった。

興味深そうな視線を向け、楽しそうに市村くんの言葉を待っているのは、奥宮さんただ一人。

「い、市村さん。その話はまた別の機会に」

ます子おばさんの制止が遅れた。

市村くんは、緊張していた顔に誇らしそうな笑顔を浮かべて言った。

「息を止めて食べました。そしたら、皮はカリカリしてるし、中身はふわつとしてて、あれ、こんなに美味しいんだって。それで調子に乗って生の芋虫を食べたら」

そこで蜂の字に眉を寄せる。

「グおええっ……て感じで。食感がまるでドロツとした生たまご…」

…」

「グおええ」

関口さんが胸に手を当てて白目を剥き、断末魔のうめきを上げた。その顔が凄まじい。

巻き髪とワインカラーワンピース、それに中央に座った男性陣2人も「おええ」と口を押さえる。

「ダイジョブですよ、みなさん。だって、焼き芋虫はホントに美味しいんですからっ」

市村くんがニコニコしながらとどめを刺した。

「香ばしさとまったりした味は、この蟹のパスタみたいです！」

わたしは、ソースの絡んだタリオリーニを一瞬凝視した。
持っていたフォークが、ポトリと皿に落ちる。

「うつ」と何かが胸にこみ上げて、慌ててナプキンを口に当てた。
関口さんが、テーブルに突っ伏してのたうっている。

「おええっ。おえええーっ」

涙で溶けたマスカラで、目のまわりは真っ黒。
みんなも、ナプキンやらハンカチで口元を抑えて大騒ぎだ。

水をがぶ飲みするひと、「ちよっとトイレへ」と大慌てで席を立つひと。

内気な市村くんが何気なく放った大砲に、全員あえなく撃沈だ。

あつけにとられてその様子を見ていた奥宮さんが、小さくプツと吹き出した。

申しけなさそうにしながらも、クスクスと笑いを抑えられないでいる。

大らかな彼の目には、目を白黒させて右往左往するわたしたちがコミカルに見えたらしい。

様子に気づいたウェイターが、大急ぎで口直しのデザートを持ってきた。

さっぱりした、ピンクグレイプフルーツのグラニテだ。

04：ダンス・イン・ザ・ミルクィウェイ（2）

「み、みなさんどうしたんですか？」

市村くんがキョトンとしてまわりを見渡している。

「お料理、口に合わないんですかね？　こんなに美味しいのに。あつ、グレープフルーツジュースのかき氷だ。千絵里さんはお嫌いですか？」

「好きです、もちろん。ただ、今はこみ上げた胃酸と核反応を起こしそうな気がするだけ」

「はあ。千絵里さんって、面白い言葉で話すんですね。編集サンって、やっぱり語彙の想像力が豊かなんですね！」

市村くんがにっこり笑う。

切れ長の目が、細い三日月みたいな半円を描いた。

意外にキュートな笑顔だ。

ん？　それにしても市村くんは、なんでわたしの名前や職業を知ってるんだろう？

ふと手元を見ると、薄い水色のカードが5枚配られている。

裏返してみると、男性陣の名前と職業が記載されている名刺だった。

男性の手元には、薄いピンクのカードが置かれている。

どうやら、会食に出席している異性のプロフィールらしい。

なんだ、市村くんはこれを見たのか。

奥宮さんの職業はなんだろう。

ドキドキしながらカードをめくっていると、「森口さん」と、ます子おばさんから突然ご指名がかかった。

「はい？」

ビックリして、顔を上げる。

ます子おばさんが、すがりつくような目でわたしに言った。

「森口さんは、日本橋の編集部にお勤めです。きっと素晴らしい書評を聞かせてくださることでしょう。さあ、森口さん、お願いしますね。みなさんは、どうぞグラニテを。お口がさっぱりしますよ」

花柄のハンカチで、吹き出す汗を盛んに煽っている。

ます子おばさんも、すっかり気持ち動転していたようだ。

市村くんが引き起こした騒動を、グラニテとわたしの書評で鎮めて欲しいらしい。

巻き髪が、片眉を上げて私を見た。

その向こうに、わたしを見つめている奥宮さん。

わたしは、バッグの中から単行本を取り出しながらみんなを見渡した。

落ち着け、千絵里。だてに7年も編集をやってきたワケじゃない。ここは先に取りられた一本を奪回するチャンスじゃないの。

「わたしが持ってきた本も、江國香織さんの」

少し上に差し上げるように本を持ち、話し始めてグツとつまる。

わたしの目も、みんなの目も、その本のカバーにそそがれていた。少女漫画風の男女が、ピンクのバラにときらめく星の中で抱き合っている。

飾り文字も華やかなタイトルは『甘い夜とヒミツの旦那さま』。

「あれ？ す、すみません。ちょっと待ってくださいね」

バッグの中を引っかき回す。

ない。持ってきたはずの本がない。もしかして、駅で転んだときに落としてしまったのかも。

バッグに入っていたのは、今日印刷所から届いたばかりの、わたしが編集した最新作の見本だった。

家に帰ったら目を通そうと思っていたのだ。

「森口さん？ その御本は？」

ます子おばさんに催促され、わたしは開き直って単行本を手にとった。

「この小説は、WEBで大人気の作家、RIKAさんの最新作です。タイトルは『甘いオフィスとヒミツの旦那さま』。

ジミで目立たない普通のOLが、超イケメンでスーパーリッチな若社長と、ヒミツの結婚をすることになってしまふというお話です。自分たちの関係を誰にも言えない2人は、新婚なのに一緒に住むこともできず、夜のオフィスで、つい、蜜のような時間をすごしてしまうのですが――」

そこまで一気にあらすじを言うと、わたしは息をすいこんで顔を上げ、残りの言葉を言い切った。

「OLの同僚にその様子を目撃され、言いふらされてしまいます。もう別れなくてはいけないとショックを受ける主人公に、若社長は言うのです。“君なしの俺の人生は、蜂蜜のない蜜ツボだ”。そして彼は、彼女こそが自分の最愛の妻なのだと、男らしくはつきり公言するのでした。あらずじは以上です」

シーンと静まったテーブル席。

男性陣の所在なさそうな表情と、女性陣の勝ち誇った笑み。

「あ、あの……」

そつと手を挙げたのは市村くんだ。

「そ、そのOLさんは、どうして若社長さんが自分の旦那さんだとハッキリ言えないんですか？ その女性が心に秘めた気持ちは、どのようなものなんでしょう？」

色白の頬を染め、わたしの目を見つめてじつと答えを待っている。その顔を見ていたら、気負っていた肩の力がフツと抜けた。素直な心に触れると、格好をつけてしまう自分がバカバカしくなる。

わたしは市村くんと言った。

「ほんとうは、みんなに自分の恋人のことを言いたいんです。でも、彼女が抱えるコンプレックスが、それをさせない。

彼女は自分がごく平凡でつまらない女だから、完璧な彼にはふさわしくないと思っています。自分が妻だなんて知られたら、彼が笑われるんじゃないかって」

「でも、若社長さんはそのOLさんが大好きなんですよね？」

「そうなんです。彼はすごくモテるにも関わらず、彼女だけを愛しています。それも、熱烈にね」

わたしは、顔を上げて言った。

「これは、働く大人の女性がまだ小さな女の子だったころから、頭の中で何度も想像するシンデレラ・ストーリーです。取り柄のない臆病な自分が、王子様のように素敵で男性に見いだされて、愛される。」

現実はそのんじゃないって知ってても、身をゆだねてみたいときがあるんです、こんな夢みたいな恋物語に。切なさに涙したり、うつとりと愛の言葉を想像したり。

そうすると、元気が出てくるんです。さあ、明日の仕事も頑張つて、いつか素敵な恋もしよう……って」

原稿に赤ペンを入れながら、主人公のOLに共感して、涙がこみ上げたこともあったっけ。

わたしはこの小説を編集していた時のことを思い出しながら、静かに言った。

「小説には、いろいろな役目があります。深淵に人の生き様を語るものもあれば、豊富な知識を与えてくれるものもある。厳しい現実に向かうための力強い相棒になってくれる小説もあれば、ふわりと甘いエッセンスで心を癒してくれる小説もあります。」

女性には、甘いお菓子が必要なんです。今日もいい日だったなって幸せな気持ちにさせてくれるような、スイーツが。」

この小説は、そんなお話です。だから、わたしは大好きなんです」

市村くんがわたしを見て、うんうんとうなずいている。
誰かが、暖かい拍手をくれた。
奥宮さんだ。

「なるほど。よくわかりました。少女のように素直な女性の気持ちですね」

わたしを見つめて、優しく笑う。

「男にも、ロマンは必要ですよ。いつかきつと自分の夢に共感してくれる相手が現れると夢想する。みんな、そんな気持ちを抱えているんだと思います」

それから、彼は言った。僕は今日、本を忘れてきてしまったのですみません、と断って。

「ドリーム・ストーリーの話します。精霊と大自然と動物たちが織りなす、不思議で美しい物語です。さつき市村さんがお話していた、アボリジニの間に伝わる壮大な神話です」

それから彼は、その神秘的な物語を話してくれた。

巨大な祖先が、大地に足跡を付けていったこと。

そこからさまざまな命が生まれていったこと。

「大学の時、オーストラリアをひとりで放浪しました。もちろん、カリカリの芋虫も食べましたよ。おかげで、アボリジニともすっかり仲良くなりました。満天の星空の中で、ディジュリドゥーの音色と共に、彼らが語ってくれたのがこの物語です」

「ディジュリドゥー？」

わたしは、思わず彼に聞いた。

「世界最古とも言われる管弦楽器ですよ。ユーカリの大枝の一端に穴をあけ、そこに白蟻をいれて芯を食べさせて作るんです。

何か、大量の虫の羽音のような、ざわめく木の葉のような、不思議な音がします。大地のノイズと言ってもいいかもしれませんね」

彼ののんびりした話し方は独特で、どこことなくユーモラスだ。つい、話に引きこまれてしまう。

「彼らの神話の中に、生き生きとした女神が出てきますよ」

彼は楽しそうに言った。

「天の川の星々は、ダンスを楽しむ女神たちの輝きだと言われています」

「へえ……。素敵ですねえ……」

女神達のダンスかあ。

陽気な笑い声が聞こえてきそう。

わたしは、彼が現地の人々と語りながら夜を過ごすところを思い浮かべた。

ワインとフランス料理が似合いそうなひとなのに、意外にワイルドなんだなあ。

女子の視線は彼に一点集中していたが、それもムリはない。彼の言葉や笑顔は見ていて気持ちよかったし、女性に対して臆す

することもなければ気負うこともない態度は男らしさを感じさせた。

こんな素敵男子が、なぜ結婚相談所主催の会食にいるのか不思議だった。

彼に主役の座を持って行かれた男性陣が、メイン料理の鴨肉の口ーストを黙々と口に運んでいる。

ビールをチビチビ飲みながら、楽しそうに奥宮さんの話を聞いている市村くん。

「奥宮さんは、旅がご趣味なんですか？」

隣のワインカラーワンピが身を乗りだして聞いた。手には、水色のカードを持っている。

わたしも、そつと彼のプロフィールを見てみた。

奥宮雅史。 31歳。 都内W大学講師。 素敵！

ワインカラーワンピが、カードを片手になおも聞く。

「ヨーロッパやリゾート地には遊びに行きます？ 奥宮さんはW大学で講師をされているんですね？ どちらにお住まいですか？ マンションで一人暮らしですか？ それともご両親と同居？」

わたしは驚いて隣の席の女子を見た。

い、いくらなんでもストレート過ぎるでしょうが。

聞いているわたしのほうが慌ててしまう。

顔を合わせたばかりでそこまで聞く？

だが、他の女子達も真剣だ。

彼女たちのひとりは、手帳を開いてペンまで構えている。

別段気を悪くした様子もなく、奥宮さんは言った。

「民俗学を研究しているので、未開地へ出かけることがほとんどです。洒落た街にはまず行きません」

失望の、小さなため息。

「住まいは、ほとんど大学の研究室。それと、あなたがお持ちのカードに記載されている職業は、正確ではないですね。僕は、常勤講師ではなく非常勤講師です。研究のかたわら、フランス語を少し教えているんです」

男性陣が、初めて奥宮さんを凝視した。

もしかして、この男より自分の価値が高いのではと、探るようにワインカラーワンピースが、品定めするように目を細めて聞く。

「非常勤といいますが、……フリーター、ということですか？ 時給いくらって契約の？」

奥宮さんが、あっさりとうなずく。

「そうですよ。そして、ご想像の通り、非常勤で教える講師の収入は不安定で微々たるものです」

彼は、誠実な口調で付け足した。

「ですから、現在の僕の職業は、あまり結婚向きではないと言えますね」

わたしを抜かした女子全員の目に、はっきりと失望が過ぎった。さっきよりも大きなため息が漏れる。

そのタイミングで、中央に座る男がこれ見よがしに咳払いした。

「僕は小室といいます。外科医です」

外・科・医、という発音にビブラートがかかっている。

勝ち誇った表情。

鼻の穴がピクピクと膨らんでさえいなければ、イケメンのカテゴリーかもしれない。

女子群の視線が、奥宮さんから小室氏に移る。

あからさまだ。

自分も崖っぷちだからひとのことは言えないけど、それにしたって。

「今日は読書会ということで、僕も愛読書を持ってきました」

彼は片手で、キザに単行本を持ち上げた。

「タイトルは『エゴイスト』。これは、僕が書いた最高にして最強の純文学作品です」

小室氏が、チラリとわたしを見る。

「もしなんなら、出版の権利について話し合ってもいいですよ？
あなたは編集者と言うことだから、最初に読ませてあげてもいい」

「はあ……」

よくいるタイプだ。

内容もおおむね想像できる。

ます子おばさんの再三に渡る制止も聞かず、小室氏は蕩々と自分の“作品”について語り始めた。

鴨肉がお皿から無くなり、デザートジェラートのジュラートが運ばれてお皿が下げられ、エスプレッソを飲み干しても、話は続いた。

ため息をこらえて、カップの底に沈んだコーヒーの粉をぼんやり見つめる。

なんて退屈な話なんだろう。

確かにこの男はエゴイストだ。まわりの人のことなんか考えてもいない。

せっかくの料理も、楽しかった雰囲気も台無しだ。

レストランからは、食事を終えた一般客が次々と帰り始めた。みんなが何度もこみ上げるあくびをかみ殺すのに必死になったころ、わたしはふと奥宮さんのいたずらに気が付いた。

わたしがあげた、あのふざけたおもちゃの眼鏡をかけている。取り澄ましたその様子に、思わずプツと吹き出してしまった。小室氏が、眉をひそめてわたしを見る。

「聞いてますか？ 森口さん」

「ごめんなさい。聞いてます」

わたしは小室氏に、神妙な顔で謝った。

「ただ、ライトのせいか、なんだか目が乾いてしまっ

た。バッグから紙の少女漫画風目玉を取り出し、瞼の上に張り付ける。

「さあ、続きをどうぞ」

小室氏の顔がサツと赤くなり、今度は、奥宮さんがクスツと笑った。

「あ。千絵里さん。レディーガガみたいですー！ カッコイイ！」

市村くんが素っ頓狂な声を上げ、退屈していたみんなに笑いが伝染した。

わたしの目と奥宮さんの眼鏡を見て、お腹を抱えている。

「では、そろそろお開きにしましょうか」

ホッとした表情で、ます子おばさんが言った。

05：スイート・ラブ・マジック

読書会が終わった後、わたしは久々に恋活への決断を迫られていた。

もちろん、相手は奥宮さんだ。

彼が持っている知的で大人な雰囲気、わたしはすごく惹かれていた。

いつまでもワルガキっぽいところのあったケンジとは、真逆のタイプだというのも、理由のひとつかもしれない。

もう少し、話をしてみたい。

彼の低くて柔らかな声を、落ち着いた場所でゆっくりと聞いてみたかった。

だが、「結婚には向かない職業だ」と、はっきり言っていたことも気にかかる。

崖っぷちで婚活しているというのに、もっと安定した職業の男性に近づくべきじゃないだろうか？

悶々と考えつつ椅子から立ち上がったものの、奥宮さんがやっぱり気になって席から離れられない。

こんな中途半端な気持ちのまま帰っては、あとできつと後悔するに決まっている。

どうしよう。帰りに声をかけてみようか。

「お茶でも一緒にいかがですか？」とか。

いやいや、この時間じゃお茶もかえって白々しい。

ストリートに誘ってみたらどうだろう。

「軽く飲みませんか？ さきほどマフラーを貸していただいたお礼がしくて」なんて。

だけど、銀座のバーなんて、ほとんど知らないし。
まさか、チエーンの居酒屋に誘うわけにもいかないし。

同僚や大学の後輩とは、男女問わず気軽に飲みに行くわたしだが、奥宮さんのような大人の素敵男子には、別のアプローチをしなくてはいいけない気がする。

わたしはいつだって男子と元気に飲み過ぎて「お前は女を意識させないからいいよ」と言われてしまうからだ。

きつと、最初が肝心なのだ。

今回こそは、女性らしく攻めてみよう。

奥宮さんは、ます子おばさんと何か話している。

チラチラ横目で様子をうかがいながら、バッグを開けたり中のポーチを手にとったりして、時間を稼いだ。

彼以外の男性は、もう全員いない。

いけ好かない巻き髪と、シビアナワインカラーワンピースは、外科医の後を追うように帰っていった。

女子で残っているのは、わたしと関口さんだけ。

彼女は、どう見ても奥宮さん狙いだ。

当面のライバルは関口さんということになるが、果たしてわたしに勝ち目はあるだろうか。

関口さんは、いつの間にか顔を可愛らしく修復していた。

さっきまでマスカラパンダになっていたのに、見事な造形能力だと感心する。

わたしもとりあえず化粧直しくらいしてこよう。

きれいに片づけられたテーブルの間を抜け、レストランの小さなトイレに入った。

頑張れ千絵里と、自分にカツを入れる。
29年も女をやってきたんじゃない。
男性ひとり、誘えないでどうするの？

木の壁に取り付けられた鏡に向い、パウダリーファンデーションをささつとのばした。

二重の中に、薄くアイシャドウ。

ビューラーで睫を上げて、ピンクベージュのグロスを唇に塗る。

「うーん。変わり映えしないなあ」

鏡の中の自分に顔を近づけて見つめ、ため息ともつかぬひとりとを漏らした。

ケンジにも「お前って、化粧する意味あんの？ 素顔と全然変わんねーじゃん」と、よく言われたものだ。

世の中の女子は、なぜみんなあんなにメイクがうまいんだろう。すでにそこから、他の女子に何歩も遅れを取っている気がする。

化粧ポーチの中に、フレグランスの試供品が入っていた。

いつも香りなんかつかないから、夏にデパートでもらってからそのまんま放ってあったのだ。

「スイート・ラブ・マジックか。つけてみるかな」

官能的な甘い香りを、指で首筋にポンポンとおまじないのように乗せる。

だが、トイレから戻ると、自分がまたもや遅れを取ったことに気が付いた。

関口さんと奥宮さんがいなくなっていたのだ。

残っているのは、ます子おばさんただ一人。

「森口さん、お疲れさまでした。これ、森口さんのお荷物よね？」

おばさんが笑顔で近づいてきて、破れたスーツ入りの大きな紙袋を手渡してくれる。

「は、はいそうです。それよりあのつ。奥宮さんは？」

「たった今お帰りになりましたよ。もしどなたかともう一度個人的にお会いになりたいようでしたら、こちらで場所と日取りを調整しますから、明日以降にご連絡くださいね」

「個人的に連絡を取ったらダメなんですか？」

「会の規約で、それはちょっと。どなたにも気持ちよく相談所を活用していただけるよう、できるだけトラブルの無い形でご連絡を取っていただいてるんですよ」

「でも」

関口さんは奥宮さんと帰ったんじゃないの？

ます子おばさんは、会場に何か他の忘れ物が無いか確認しながら、「次の企画はまた近々ご案内しますね」と言った。

「次の？」

ってことは、今回はもう終わり？

思いがけず素敵男子に会うことはできたけど、ただそれだけだ。

これで1万5000円の企画が終了だなんて。
婚活って、なんて厳しいんだろう。

きれいに片づけられたテーブルの間を、とぼとぼ歩いてエントランスへ向かう。

結局、奥宮さんにマフラーも返しそびれてしまった。
考えてみれば、それを口実にアドレスを聞けばよかったのだ。
クリーニングしてお返ししますと言って。

あまりに長い間恋活していなかったから、アプローチのしかたも
すっかり忘れてしまった。

毎日あれほど恋愛小説を読んでいるのにな……。

「こんなわたしに結婚のチャンスなんてあるのかなあ……」

先が思いやられてため息が出てしまう。

せまい階段を下り、駅へと足を向けた。

この時間になると、大通りもそれほどひとの影はない。
街に残っていた恋人達は、みなどこか恋を語らう場所へ吸い込まれて行っただろう。

独りが身に染みる。

しばらく歩いたところで、ふと顔を上げた。

少し先に、背の高い男性の、広い背中が見える。

奥宮さんだ！

隣には誰もいなかった。

関口さんと帰ったんじゃないかなかったんだ！

「奥宮さん！」

後ろから大きな声をかけ、嬉しさを弾みながら駆け寄った。頭の中では、次に言う言葉が鳴り響いている。奥宮さん、マフラーをありがとございました！ お礼をしたいんです。良かったら、近くで一緒に飲みませんか？

奥宮さんが、足を止めて後ろを振り返る。

わたしに気が付いてくれたのだ。

「奥宮さん……」

次の言葉が出なかった。

わたしを見る奥宮さんが、別人のように見えたからだ。

レストランで見たときは、まどっているオーラが違う。

大人っぽい表情と都会的であか抜けた雰囲気。

笑顔が消えた端整な顔に、近寄りがたさを感じてしまう。

「奥宮さん、あの。さっきはマフラー……」

その時、歩道に寄せて一台の車が入ってきた。

ダークカラーのBM。

左側の車窓が半分ほど開き、サングラスをかけた女性の美しい横顔が現れた。

「乗って」

彼女が、そう一言だけ言うのが聞こえた。

奥宮さんはわたしからスッと目をそらすと、何も言わずその車に乗り、去っていった。

すべてが一瞬のできごとだった。

「ウソ。いったいどういうこと？」

呆然と、立ちつくしていた。

婚活の読書会に出席した男性が、女性、それもとびきり美人の車に乗って帰っていきなんて。

奥宮さんは、まるで違うひとになってしまったかのようだった。もっと大人で、別の世界を知ってるひとみたいに。

地下鉄で見せてくれた優しい笑顔や、レストランでの、親しみのある大らかな雰囲気はなんだったんだろう。

——今夜は退屈な会に出なくちゃいけないので。

電車の中で、奥宮さんは、確かそう言っていた。

たぶん、ほんとうは婚活する必要なんかないひとなんだ。

住む世界が違う気がする。

おそらく何かの手違いで、読書会に出ざるを得なくなったただけなんだろう。

婚活に意気込むあまり、カチカチに緊張していたわたしたちに、大人の余裕を見せてくれたのだ。

ガックリと肩が落ちた。

ひとりで空回りして、奥宮さんの笑顔に個人的な好意を感じたなんて。

自惚れもいいとこだ。

あのBMの女性が月だとしたら、わたしはスッポンの餌だもの。

最低の気持ちだった。

そして、そんな気持ちの時にこそ、余分なおまけはついてくるものだ。

わたしは自分の手に持った荷物がひとつ足りないことに突然気が付いた。

「しまった。ケーキを忘れた！」

マリエちゃん達がみんなで買ってくれたバースデーケーキ。きつと、レストランだ。

中身が潰れているのは間違いないが、それでもこのまま置いて帰る気にはなれない。

くるりと方向転換して、来た道を駆け戻った。

息を切らしてレストランの階段にたどり着く。

すると、そこに本日のおまけがあった。

緑のジャケットを着た華奢な男子が階段に座り、ぐったりと壁にもたれかかっていたのだ。

「い、市村くん!？」

大急ぎで駆け寄って、そっと肩を揺する。軽く触っただけなのに、目を閉じた小さな顔が、ガックリと後ろへのけぞった。

「ちょっと! しっかり!」

今度は、頭がグラリと下を向く。

首がブランブランと揺れて、壊れた操り人形みたいだ。

「もしかして、酔っちゃったの!？ 今までどこにいたのよ?」

「……トイレに」

それで、姿が見えなかったのだ。

「大丈夫？ わたしが誰だかわかる？」

急性アルコール中毒を起こしてしまったかと心配になる。

お酒、すごく弱いんだって言ってたのに、もっと気をつけてあげればよかった。

市村くんがのろのろと答える。

「……千絵里さんです」

「待つて。お店のひと、呼んでくるね」

急いで階段を駆け上がり、真鍮のノブをまわした。

だが、ドアはびくともしない。

すき間からはまだ光が漏れているが、閉店時間を過ぎてしまったのだろう。

ます子おばさんの姿も見えない。

「どうしよ」

すぐに階段を駆け下り、市村くんの横にしゃがんで顔をのぞき込んだ。

市村くんの顔は、真っ青を通り越して真っ白だ。

「救急車呼ばうか？」

市村くんが首を力なく左右に振る。

「いいえ……。家のひとに迷惑かけちゃうから」

「そんなこと言ってられないでしょ！」

「絶対ダメなんです。お願いします……」

「じゃあ、タクシーに乗ろう。家まで送ってくから」

「……それもダメ。僕、酔いが覚めるまでここにいますから、千絵里さん、心配しないでくださ……。忘れ物、ちゃんと……」

そのまま、彼はだらりと階段に身体を投げた。

昔、美術の教科書でこんなを見たことがある。
生ハムみたいにぐんにやりした、ダリの時計だ。

「市村くんてば！」

顔に耳を近づけ、呼吸に耳を澄ました。

市村くんは、規則正しく呼吸していた。
ただ、ぐっすり眠っているだけだ。

「そうだ。プロフィールのカード」

さっきレストランで渡された、市村くんの名刺を探す。

「これだ」

市村愛之真。24歳。職業：家業見習い。

「家業見習い？ なんなのよ。ヒントが全くないじゃない。どうしよう。困ったなあ」

途方に暮れて、市村くんを見下ろした。

彼の手に、白い紙の箱が握られているのに、ようやく気が付く。

「わたしのケーキだ」

彼はその箱をいかにも大切そうに抱えていた。

もしかして、これをわたしに届けようとしてくれたんだろうか。レストランの中にいれば、誰かが介抱してくれたに違いないのに。

「ここで酔いを覚ますなんてムリだよ。暖かいところに移動しなくちゃ」

街は、ますます冷え込んできていた。

通りを歩く人たちは、コートやダウンを着込んでいる。

泥酔した男を気安く受け入れてくれる飲食店や、泊めてくれるホテルがあるとも思えなかった。

わたしはため息をつき、グッタリした市村くんを両手で抱きかかえた。

「よいっしょ！ ほら、わたしにつかまって」

いくら華奢とはいえ、意識のない身体は重い。

だが、わたしはありがたいことに、今でもバリバリの体育会系だ。わたしの荷物を持つてくれる男はいないが、自分で荷物を持つ力はあるのだ。

「落つこちないでよ」

なんとか市村くんを背負うと、よろける足で通りに向かう。

片方の手で、背中の市村くんを支えた。

もう片方に、大きな紙袋とケーキの箱。

これが渋谷だったらクスクス笑いと冷やかしが飛んでくるところだが、ここは大人の街、銀座だ。

みんな、さりげなく目をそらしてくれる。

夜の銀座は、タクシーに困ることはないのが幸いだ。
すぐに、ライトをつけたタクシーが近づいてくる。

横付けされたタクシーの自動扉が開き、わたしは市村くんの身体をなんとか車内へ押し込んだ。

東西線上にある、自分のマンションの住所を告げる。

乗車賃がいくらかかるかと考えると鬱になりそうだ。

だが、わたしにケーキを届けるために酔った身体でレストランを出てきた男を、ここで凍死させてしまったら、もっと鬱になることは間違いなかった。

市村くんは、子どものように安心してぐっすり寝ている。

ほんとうに24歳？ 実家の弟よりも幼く見えるくらいなのに。

こんな子を、自宅にお持ち帰りするなんて、我ながらやれやれだ。

「……千絵里さん、いい匂いがしますー」

わたしの肩にもたれかかった市村くんが、寝言のようにつぶやいた。

「梅酒みたいです……」

「梅酒つて。あんたのためにつけたフレグランスじゃないんだけどねえ」

まったく、今日ほどアクシデントに見舞われた日もない。
この先、わたしの婚活はどうなることやら。

06・ミスティ・ウーマン

「森口……。お前なあ。せめて、寝るなら口閉じろ」

編集長の、呆れた声で目を覚ました。

「あ？ あらひれふか？」

どうやら、ポカンと口を開けて居眠りをしていたらしい。

目をしばたいてあたりを見渡すと、昼さがりでひともまばらな編集部だった。

わたしの机の上には、プラスティックの蓋を外した、持ち帰りの牛丼が置いてある。

中身はカラ。

昼ご飯に、佐瀬くんを買ってきてもらった牛丼を口に入れたまでは覚えているのだが、その先の記憶がなかった。

ちなみに、佐瀬くんというのはうちのWEB小説サイトのシステムエンジニアで、去年専門学校を卒業して入社した新人だ。

一年中、デニムとTシャツばかり着ている。

広いフロアを横切ってちよくちよく書籍編集ゾーンに顔を出すので、猫の手も借りたいわたしとしては、必然的にお使いを頼んでしまうことになるのだ。

「すみません。肩こりが酷くてー」

わたしは首を左右に大きく振ってコキコキと鳴らしながら言った。

「肩こりと居眠りの関係はどこにあるんだ」

編集長が粉末の胃腸薬を開ける。

このところ、しょっちゅう見かけるシーンだ。

寝不足とストレスで胃が痛むらしいのだが、わたしの考えではがぶ飲みのブラックコーヒーと机の引き出しに常備しているお菓子の山が関係していると思う。

「つまりですね。強烈な肩こりをどうにかしようにもマッサージに行っている暇が無く。しかたなく天井を見て、首筋を伸ばすわけですよ。そうするとそのまま寝ちゃうというルーティン」

「そして口が開くんだな」

「その通りです。でも、今朝から鬼のように仕事をして、ちゃんとやるべきことは終わらせましたよ。今日中に発送しなくちゃならない直しの原稿は全部出したし」

「お前の赤ペンは情け容赦ないと作家の間で評判だそうだぞ」

編集長がわたしを見てニヤリと笑い、胃腸薬をブラックコーヒーで胃に流し込んだ。

「あら。そうですか？ でもわたし、赤文字と一緒に、愛もめいっぱい込めてるから大丈夫です」

隣の席で、弓子がクスクスと笑っている。

なぜか、わたしと編集長の会話は、そのまま掛け合い漫才になってしまいうらしい。

編集長が「さてとー」と腰を伸ばして席から立ち上がり、時計を確認しながら言った。

「3時からの会議は忘れてないな？ 新しいWEBサイトの目玉企画について、何か新しい案は浮かんだか？」

わたしは一瞬ビクツと動きを止めてから、ことさらはつきりと答えた。

「ええ。もちろん！ 会議の、時に、お話しします」

人間、大嘘をつかなくてはいけないときは、必要以上に真面目な顔になる。

編集長はわたしの顔を見て「ふうん」と言い、チョコレート箱をポンと投げてよこすとフロアから出て行った。

その後ろ姿がドアから見えなくなったとたん、わたしは慌ててパソコンを開いた。

「まずい……。寝不足ですっかり忘れてた、今日の会議のこと。なんかWEBにネタ落ちてないかな」

ディスプレイに、最新ニュースがずらりと並ぶ。

わたしは画面を食い入るように見つめた。

政治のニュース。スポーツのニュース。

だめだめ、男性向けの企画じゃないんだもの。

弓子が気の毒そうに言う。

「あーあ。千絵里、それはマズイわ。今日は織田社長も出席する会議なのに」

「わかってる。だから焦ってるの」

織田社長は切れ者で、社員への物言いも歯に衣着せない。

今まで繰り返した会議の中で何度もダメ出しされ、真剣に考えるあまり煮詰まってしまった。

会社の中でも、大きなプロジェクトだった。

それまで対象年齢が低かったWEB小説に、大人の女性を一気に取り込むという企画。

もし成功すれば、その先いくつもの可能性が開ける。

わたしの横で、弓子が書き込みだらけの手帳を広げた。

「あんまり自信はないんだけど、いくつか考えてきたよ。とりあえず、ここから何か使ってみる？」

母親業が板についているせいか、何かと几帳面で行き届いている弓子が言う。

「たぶん、今日も企画はまとまらないよ。織田社長、手厳しいからねえ」

わたしは女性向けのニュースサイトを必死に目で追いながら言った。

ファッション、グルメ、恋愛相談。

「ありがと。でも、ギリギリまで頑張ってみる」

「ところで、なんで寝不足なの？」

突然、弓子が聞いた。

「昨日の読書会で素敵な相手にお持ち帰りでもされたの？ その件

について、めずらしく朝から何も話さないけど」

からかうような口調。

「言えるような内容じゃないからよ。わたしがお持ち帰りしちゃったんだもん」

「ええっ！」

弓子が驚く声で、WEBの中の世界から現実に取り戻された。自分の重大発言に気付いて、今さらながらハツとする。

「じじじじゃなくてっ！」

うつかり、本当のことを言ってしまった。

弓子が興味津々といった顔でわたしをのぞき込む。

「なによ、水くさい。話してよ。イケメン？ 歳は？」

わたしはあきらめて弓子を見た。

遅かれ早かれ、勘のいい弓子には見抜かれてしまっただろうからだ。

「あのね。妙齡のイケメンが必死で婚活すると思う？」

「あー」

弓子がちよつと考える。

「でも、千絵里が即お持ち帰りなんて、よっぽどフィーリングが合った相手なんじゃないの？」

わたしは大きく横に首を振った。

「違うのよ。その子がビールで泥酔しちゃったの。昨日の寒さの中、正体不明で眠りこけている男を放って帰れると思う？ わたしの忘れ物のケーキを届けるために、レストランから出てきちゃった子なのに」

「子って、相手が高校生みたいな言い方」

「ほんとくに、高校生に見えるんだもの。世間ずれしてないし、肌はすべすべして綺麗だし、指もスツと細くて女の子みたい。24歳だって。職業は家業見習い。わかるのはそれだけ」

弓子がわーおと言った。

「その彼って結構美味しいんじゃないの？」

「何もしてないってば！」

わたしは慌てて否定した。

「いくら枯れそうでも、味見なんてしてないよ。第一、そんな気が起きる相手じゃな」

「ううん。そういう意味じゃなくて。その彼、いいところのお坊ちゃんなんじゃないかってこと。苦労がにじむ手でもなく、きちんとした育ちと性格の良さを感じるんでしょ？ 持ち物はどつだった？」

持ち物？

「うーん。あ、そういえば、昨夜わたしの部屋に着いてからなんとか脱がせた緑のジャケットには、バーニーズのタグが付いていた」

「ほらね」

「なるほど、そういう見方もあるのか」

冷静な分析をする弓子に感心する。

「ドライな女と思われてもかまわないけど、男を見る目が厳しくなっちゃったのよ。あとでガツンと食らわされないように、推測できるところはして身構えてる感じね」

確かに、彼女の元夫と結婚していたら、誰だって男選びに慎重になろうというものだ。

「どこか、会社の二代目とかなのかなあ」

わたしは市村くんのおとなしそうな顔を思い浮かべてつぶやいた。ひとが良くて、空気の読めない市村くん。女性の気持ちを知っていた市村くん。

家業見習いという文字を見たとき、わたしの頭に浮かんだのは、板前さんとか職人さんだった。

だが、そうであれば、弓子の言うとおり、もっと職人らしい手であるはずだ。

「実は、大会社の御曹司とか？」

わたしが笑って言うと、弓子が机に肘をついて、ほっそりした手に顎を寄せ、夢見るようにつぶやいた。

「だったらいいよね。年下で、将来安定。しかも、千絵里に惚れる。足もともおぼつかないのに、頑張ってケーキを届けて」

「それはどうだか。根が親切でいい子だからじゃないかな」

「ロマンティックじゃない。羨ましい。わたしが今編集してるMA RIさんの作品も、そんな出会いなの」

わたしは、弓子の言葉に微笑んだ。

口ではどう言おうと、弓子だってやっぱりロマンスには憧れているのだ。辛い離婚を経験した今でも。

「どっちにしても、彼はもうマンションにはいないよ」

わたしがそう言うと、弓子が顔を上げた。

「そうなの？ 残念」

「礼儀正しい子なのよ」

酔っているのに、玄関で寝ると言い張った市村くん。

わたしが「鍵は玄関のポストのすき間から投げこんどいて。部屋番号は302。ダイヤル式だから、誰も鍵を取り出せないし大丈夫」と声をかけて出社したときには、寝ぼけながらも「はい、わかりました。ごめんなさい」と返事をしたのだ。

名前しか知らない市村くん。

もう会うこともないだろう。

その時、ドアから佐瀬くんが入ってきた。
伸びかけた明るい色の髪と、デニムにＴシャツのラフなファッション。

足もとはいつものスニーカーだ。

わたしをまっすぐに見て「おはようございます、森口さん。もう、何も用事ないっすか？」と聞く。呼べばすぐこっちへ飛んできそうな雰囲気だ。

「特に今はないよ。さっき、牛井ありがと」

「いえ。俺でよかったらいつでもどうぞ」

佐瀬くんはしょっちゅうわたしのところへ来る。

というか、なぜかわたしのところだけに来る。

修正中のWEBサイトのシステムについて意見を聞きたいとか、女性としてはどんな配色に惹かれると思うか、とか。

ちよつとイケメンサッカー選手に似た可愛い顔をしているから、編集部的女子達の間でも人気が高いらしい。

今も、何人もの女の子がわたしに視線を向けている。

「弟みたいなもんだから」

わたしは、誰に言い訳するでもなくそう口にした。

「前も言ったけど、弟が10歳年下なの」

わたしが自分でもわからない理由でちょっと赤くなっている間に、弓子が猛烈な勢いでパソコンを叩いていた。

「これ何？ 弓子」

「会議で説明することを順番に打ち出してるの。準備しておかないと、私、とつさのことに対処できないから」

その言葉で現実に戻る。

「わたしも早くなにか探さない」と

時計を見ながら焦る。

「もう30分しかないよ……。……って何これ。こんな時にネットに繋がらない！」

「見ますか？」

すぐに、佐瀬くんが席から立ち上がった。
こっちへ、大股で歩いてくる。

彼はわたしのノートパソコンに触れ「ワイヤレスが接続されてないっすね。何かしました？」と聞いた。

手際よくあちこち調べる。

弟みたいな男子がてきぱきパソコンを操作しているからって、どうして赤くなるの？ 千絵里。

まあ、確かにイケメンだけど……。
って、しっかりしなさい！ わたし！

「あ」

佐瀬くんが言った。

「ワイヤレスのスイッチがオフになってます」

「え？　それだけ？」

ポカンとするわたしの目の前で、インターネットがあっけなく繋がった。

佐瀬くんが笑う。

いい笑顔だ。

「千絵里さん、そそっかしいからなあ」

佐瀬くんが「わかんないからって適当にボタンに触れちゃダメですよ」と言いながら、いくつかWEBページをクリックした。

男っぽくて長い指。

佐瀬くんは、まるでこの席から去りがたいとでもいうように、いくつもページを開いている。

ちよつと、佐瀬くん。

女の子達が見てるってば。

ひとりで焦るわたし。

佐瀬くんが言った。

「ちよつと反応が遅いな。よかつたら、あとで見ときます」

「い、いいよ。佐瀬くん、新しいWEBサイトのことです、もう3ヶ月も休み取ってないんですよ？」

「それは仕事。これは趣味ですから」

し、趣味？

「へっ……。へー。佐瀬くん、わたしが趣味なんだー」

うまく冗談で切り返したつもりだった。

不覚にも、声がうわずってしまわなければ。

佐瀬くんは、揺れるわたしの気も知らずに、ディスプレイに映った美人キャスターを指さした。

「香山セシルだ。千絵里さんにちよつと似てますよね？ こつ、うつむいた時とか」

突然の褒め言葉に照れるあまり、わたしは「わっはっはっ」と豪快に笑ってしまった。

「まーさーかー。香山セシルっていったら、大人気の、恋多き才色兼備キャスターじゃない」

「美人ですよー」

そう口をはさんできたのは、今日もショップスタッフ風にひらひらの服を着たマリエちゃんだ。

手に色見本を持って、書籍の帯を決めている。

「ジェルネイルがすごいセンスいいんですー。また恋人変えたんですよー。今度はイケメン野球選手かなにかとー」

その隣りに座ってチラチラと佐瀬くんを見ていたアキちゃんが羨ましそうに言った。

「いいなあ。モテる女性ってどんな気持ちなんでしょうねえ。好き

な相手をなんの苦もなく手に入れられるなんて」

「わたしも全然わかんないよ」

アキちゃんに同調して頷く。

「モテ女の気持ちなんかブラックホールなみに謎。わたしなんか、生まれてから一度もモテたことがないんだもん」

もう、記憶もかすみそうな幼稚園の年中時代は別として。

「ほんとに羨ましいよね。ああも次々、名だたるイケメンから言い寄られて。いちど、成り代わって見たいよ。どんな気持ちができるものか……」

そう口に出したとき、フツとひらめいた。

「ねえ、確か香山セシルって、以前文芸誌でデビュー小説書いてなかったっけ？」

ずっと無言でキーボードを叩いていた弓子が、パソコンから顔を上げてわたしに答えた。

「うん。書いてた。読んだことあるよ。海辺で恋人と過ごした記憶がなんとかとか、よくある“窓を打つ雨のシーン”で始まる小説。匿名で文芸賞に投稿して、2次まで残ったんだよね。それが数ヶ月後に香山セシル著で文芸誌に載ったっていう。

文体は綺麗だし、噂の恋人との関係を書いたらしいとその時は話題だったけど、結局、作家としてはダメだったよね。内容が抽象的過ぎて、私も特に印象に残らなかったなあ」

「綺麗な言葉で包みすぎたんじゃないのかな」

わたしは考えながら言った。

彼女の人気は、強いカリスマ性からなるものだ。

それは、誰でも手に入れられるものではない。

文章にも、きっと現れるはずなのに。

「本音を書かなかったから、作品として中途半端になったんじゃないかな……」。

もし、香山セシルが本音で恋愛を語ったらどう？ 美人で謎めいた彼女の、数多い恋愛体験をもとにしたエッセイ」

アキちゃんがピュツと手を挙げた。

「あたし、読みたいです！ あたしでも、少しは女子力磨けるかもしれないですもん」

「私も読みたいよ。彼女が恋愛を繰り返す理由が知りたい」と、弓子。

わたしは小さくつぶやいた。

「今どき女子が興味を持たずにいられない、本気恋愛エッセイ……」

これだ！

わたしはディスプレイの中で婉然と微笑む美人キャスターを見ながら言った。

「体当たりしてみる。ありがとう、佐瀬くん」

07：センチメンタル・オトナ・ガール

40分後、わたしは会議室で精一杯二本の足を踏ん張っていた。織田社長の情け容赦ないツツコミの嵐で、椅子ごと場外へ吹き飛ばされてしまいそうだったからだ。

「確かに、話題になるだろう。だが、香山セシルにどうやってコンタクトを取る？ マスコミ嫌いで有名だ。インタビューであれ、エッセイであれ、かつて自分の恋愛歴を語ったことは一切ない。そんな人物が、WEBサイトでの執筆を了承すると？」

織田社長が椅子に背を預けてわたしを見る。

ワックスで固めた黒髪の下で、厳しい目がキラリと光った。

「具体的な案はまだです。ただ」

「ただ、なんだ？ 一応断つとくが、俺はレバタラの話が大嫌いだ。実現可能の話をしる」

社長がすがめた目を見て、アキちゃんが震え上がっている。

もしかして、“その筋”から抜擢された社長さんなんじゃないですかねとわたしに聞いたこともあるアキちゃんだ。

まあ、確かに仕事では怖い。

だが、オフでは優しいパパなのだ。

携帯の待ち受けは3歳の娘さんと愛犬のフレンチ・ブルで、休日には川原でバーベキューもする。

わたしは仕事の鬼モードに切り替わっている織田社長に言った。

「他の人がコンタクトできないからわたしもできないってお考えはどうでしょう。前例で決めつけるのは硬すぎだと思います。社長はよくおっしゃってるじゃないですか。自由に柔軟な発想が新しい時代を築くんだって」

「その通り。そしてお前は新しい時代を築くんだな？ 森口」

「そのつもりです。香山セシールは、ドラマティックな恋の行方やセレブなファッションセンスなど、現在の女性達が目を離せない輝きを持っています。彼女が本音でエッセイを書いてくれたら、多くの女性が注目するはず」

斜め前に座った編集長が、わたしの言葉に小さく頷いてくれたのがわかる。

それに励まされ、残りの言葉を続けた。

「彼女はまた、以前文芸誌で作品を発表しているように、文筆に対する強い興味があると思います。ものを書きたい、発表して認められたいという欲求は、一度持ったらなかなか捨てられるものじゃありません。そこをうまくすぐることができれば。

交渉は困難を極めると思いますが、成功したら、新サイトに絶大な知名度を与えてくれるのは間違いありません」

織田社長が、指を頬について考えるように話を聞いている。

「自信があるのか」

「ええ」

長い編集生活で、ハツタリも身に付いた。

あとは、そこに向かって遮二無二努力するだけだ。
わたしを見つめていた社長が言った。

「時間がないぞ。サイトオープンまで残り一ヶ月だ」

「わかってます。早急に交渉にとりかかります」

「今すぐ取りかかれ。今日の会議はこれで終わりだ」

「え。じゃあこの案は」

鬼社長の顔を、半信半疑で見た。

織田社長がはつきり答えた。

「採用だ。メイン企画にする」

隣りに座った弓子がわたしの顔を見上げ、小さく「やった！」と
声を出す。

成り行きを見守っていたアキちゃんの顔にも安堵の笑みが浮かんだ。
だ。

いつもつかみ所のないマリエちゃんも、わたしを見て、感心した
表情を浮かべている。

「頑張ります！」

わたしは社長の目を見て言った。

会議室を出ると、すぐにアキちゃんが話しかけてくる。

「森口さん、すごいです！ 香山セシールがうちのサイトに書いてくれたら、すごい素敵です！ 友達にも親にも自慢しちゃう！」

「決まったら喜んでよ。まだ企画が通った段階だもの。これから頑張らないと」

アキちゃんがふわりとしたショートボブの髪を揺らし、くったくない笑顔を向けた。

「ダイジョブです。そんな気がします。千絵里さんなら、きっと」

「ありがとう」

わたしはそう言って笑い、アキちゃんが弾む足取りで廊下を歩き去るのを見ていた。

自販機の前で立ち止まり、ふと思い立って野菜ジュースを買う。カタンと音を立てて落ちてきた紙パックを取り上げながら、つぶやいた。

「ただでさえ、定時に帰宅できなくて食生活がめちゃくちゃなのに、これからますますダメになっちゃうなあ」

マンションの狭いキッチンは、カラになったテイクアウトのパッケージと、使ったつもりで干からびた野菜が詰まったゴミ袋が場所を取っているありさまだ。

昨日の晩、銀座のイタリアンレストランで食べた料理が、久々のきちんとした食事だった。

今度のんびり食事をとることができるのはいつだろう。

レストランの柔らかい灯りに照らされた、奥宮さんの笑顔が浮かんだ。

好き嫌いが何もないんだって言ってたな……。

彼ならきつと、どんな料理でも楽しんで食べるんだろう。

そして、グラスを傾けながら、世界中で経験した胸躍る話をしてくれるのだ。

赤い大地に住む神秘的な人々や、天の川で踊る女神達のロマンスまで、時間を忘れて彼の話に聞き入るのは、どんなに素敵なことだろう。

細いストローで野菜ジュースをすすりながら、しばし妄想に耽った。

……そんなとき、彼はあの魅力的な笑顔を向けてくれるんだろうな。

もちろん夜はあの腕の中に抱かれて……うつふつぶ。

妄想が膨らんだところで、パックの底に残ったジュースがズズーッと豪快な音を立てた。

そこで現実に取り戻される。

「いかにいかに。よそのひとの王子様に恋したって始まらない」

BMに乗ったあの女性。

美貌と、お金と、奥宮さんを持っているあの女性。

世の中、全てを手に入れている幸せな女子も存在するってことなのだ。

天は二物を与えず、なんてことはない。

二物どころか、三物、四物を与えられたひとと存在するのは、29年と11ヶ月の人生の中で体験済みだ。

「わたしは恋人どころか、婚活もひとまずお預けだよ」

まずは、香山セシルにどうやってアプローチするか考えなくちゃ。

「千絵里」

後ろから、弓子に声をかけられた。

パタパタと廊下を走ってくる小さな足音も聞こえる。

「ちえりおねえちゃん！」

振り返ると、長い髪を可愛らしく編み込んだ小さな女の子が、笑顔で浮かべて抱きついてきた。

「ともかちゃん」

わたしはタータンチェックのスカートをはいた小さな女の子を、ギョツと抱きしめた。

頬に触れる柔らかい髪から、暖かな日なたの匂いをする。

「どうしたの？ ママのところに来たの？」

わたしはともかちゃんの可愛い顔を見て聞いた。

ともかちゃんは4歳になったばかりの、弓子の愛娘だ。

黒目がちの瞳と、色白の頬に浮かんだ片えくぼが愛らしい。

「うん。今日はここからはいくえんの床をきれいにする日なんだよ。だからともか、ママのところに来たの。ひろくんのママが送ってくれたの」

くったくない笑顔につられて、わたしも思わず微笑んでしまう。
「そうなの。今日はママに早く会えてよかったね」

「うん！」

ともかちゃんは嬉しそうに頷くと、弓子を振り返った。
弓子も笑顔になっている。

「私、ともかを見なくちゃならないから、今日はこれであがるね。
仕事は家に持ち帰るわ」

わたしは立ち上がってともかちゃんの頭を撫でると、責任感の強い弓子に言った。

「今日は金曜だもん。たまにはゆっくり週末を過ごしなよ。弓子は
仕事しすぎだよ。ともかちゃんだって、ママといっぱい遊びたいよ
ねえ」

「うん。ともかね、ママと公園いきたいの」

「ほらね」

わたしはともかちゃんのなめらかな頬を、指先でちょんとつついた。
「た。」

ともかちゃんがぐすぐつたがってキヤアと笑い声を上げる。

「おっ。ともかちゃん」

偶然ドアから出てきた佐瀬くんが、まるで子イヌにそつするように、廊下にしゃがんでともかちゃんに両手を広げた。

「おいで」

「させくん!」

ともかちゃんが転がるように走って行って、佐瀬くんの腕の中に飛び込んだ。

背の高い佐瀬くんが、ともかちゃんを高く抱き上げる。

「おー。100グラム重くなったなー。プリン一個分だ。おやつにプリン食べたろ?」

佐瀬くんがともかちゃんに笑ってそう言い、ともかちゃんが目を丸くして言う。

「どうしてわかるの? させくんてまほうつかいなの?」

「バレたか。させくんはレベル7の魔法使いなんだぞ」

佐瀬くんは神妙な顔でそう言うてから、ともかちゃんの顔を見てつけたした。

「ほんとうは、口からプリンの匂いがするからさ」

「なんだあ」

ほのぼのとしたやりとりに、心がほっこりする。
佐瀬くんはいい子だなあ。

だが、弓子は笑顔を見せず、そっけなく言った。

「いくよ、ともか。佐瀬くんはお仕事中だからね」

弓子は、時々男子にこんな態度を取ることがある。

特に、ともかちゃんを連れていると、守りの母親モードが全開になって緊張してしまうらしい。

両親の離婚騒ぎで傷ついたともかちゃんがよその男性に笑顔を見せるようになったのは、ここ最近のことだからだ。

「大丈夫です。立川さん帰りの支度してるあいだ、ともかちゃんと下で遊んでいます」

気を悪くした様子も見せず佐瀬くんがそう言い、笑顔に向けた。

弓子が表情を硬くしたままだったので、わたしが代わりに笑顔を返す。

「頼むね、佐瀬くん」

ともかちゃんが佐瀬くんの手にぶら下がってスキップしながら廊下の角を消えると、弓子がようやくほっとした顔をした。

「佐瀬くんを悪く思ってるわけじゃないのよ」

「うん。わかってる」

わたしはそう言って、弓子の背にポン手を置いた。

「したくしておいでよ。あ、さっき編集長がくれたチョコレート、よかったらともかちゃんに持ってって」

「ありがとう」

弓子が笑顔を見せ、それからふと思い出したように言った。

「そうだ。これを渡そうと思ってたんだった。千絵里、これ」

愛用の手帳にはさんであつた小さなカードを取り出してわたしに渡す。

「これ、なに？ 名刺？」

香山セシールの名刺だった。連絡先が書いてある。

「すごい！ どうしたの？ 彼女のこと、知ってるの？」

「思い出したの。ほら、以前彼女、文壇目指してたじゃない？ 文芸賞を主催する出版社がクリスマスパーティー開いて、わたしも招かれたのよ。ほらわたし、一時、女性誌の編集に回ってたでしょ？ 彼女の処女作のこと、記事にしようと話しかけたら、その時にこれを」

「ありがとう！ 助かる！」

「とはいえ、3年前の名刺だからねえ。その連絡先がまだ生きてるのかは不明」

「ダメもとだもん。すぐに連絡してみる」

弓子がわたしを見て頷いた。

「頑張つて。千絵里ならやれるよ。期待してる」

自分の席に戻り、電話の前で深呼吸した。

片手に持った、香山セシールの名刺。

そこに記された番号通りに、ボタンを押した。

耳に付けた受話器から、呼び出し音が聞こえている。

期待と不安で心臓がドキドキと鳴っていた。

どうか繋がりますように。

だが、無情にも、呼び出し音は機械的な録音メッセージに変わった。

『ご利用の方はメッセージをどうぞ』

拍子抜けしたが、しかたがない。

わたしはできるだけ落ち着いた声で言った。

「スイートプラム出版の森口と申します。香山さんに弊社WEBサイトでの執筆をお願いしたく、お電話いたしました——」

メッセージを録音し、祈る気持ちで電話を切る。

「返事くるといいなあ」

「お前は運がいいから大丈夫だ」

そう言ったのは、編集長だ。

「忘年会の福引きで、毎年景品もらってるだろ」

「そうでした。確かに、7年連続忘年会のクジに当たってます。去

年は新巻鮭。一昨年は温泉旅行券。その前は、なんだっけ。ともかく、自分の運は全部クジ運に吸い取られてる気がします」

うふふ、とマリエちゃんが笑う。

「けど、ほんと毎年ってスゴイですね」

「新巻鮭は、ひとりで食べきるまでに一ヶ月。温泉旅行は一緒に行く相手がつかまらなくて、哀愁のひとり旅。独り身を実感させる景品なんだ、これがまた。」

このクジ運が婚活に向けばいいのに」

まわりのみんなは爆笑したが、わたしには笑い事じゃない。

まあ、とりあえず、このナンバーが生きていることを知っただけでもよしでしょうか。

その日は、香山セシールの返事が気になって、しばらくは仕事に手が着かなかった。

もしも、何か連絡があつたらすぐに飛び出せるようにと、原稿読みの仕事もすべて会社のデスク。

夜の11時近くまで、食事も取らずに仕事をしていたが、さすがに今日のところはあきらめるかと椅子から立ち上がる。

見渡すと、フロアにほとんどひとはいない。

「わたし、今日はこれであがります」

パソコンに向き合ってずっと仕事をしている編集長に声をかける。

「ああ。お疲れ。今何時だ？」

編集長が目をしばたき、眉間を指先でつまみながらわたしに聞いた。

「１１時になりますよ。編集長は食事とりました？」

「さっきラーメンを大盛りで食ってきた。今週は、昼は毎日牛丼で、夜は毎晩ラーメンだったな」

「そんなに好きなんですか？」

「どっちも、会社から一番近くて早い」

「ああ、確かにねえ。けど、むちゃくちゃな食生活ばかり送って睡眠不足続けると、早死にしますよ。可愛いお嬢さんを置いて、ポツクリと」

編集長を脅してみたものの、正直、わたしもひとのことは言えない。

案の定、編集長が言った

「お前もな、森口。夜１０時過ぎの飲食は、年齢に比例して脂肪に変わるぞ。３０を越えたら加速度は倍だそうだ」

くつ。気にしていることを。

「それじゃ、今夜は夕食食べませんっ！……って言うてみたいもんですけど、しっかり食べます。わたしですから」

編集長がクツクツと笑った。

「まあ、元気が何よりだ」

「それじゃ、お先に失礼しまーす」

わたしは原稿でズッシリと重くなったバッグを肩にかけ、編集部を横切った。

帰り際、ちらりとフロアに目をやると、佐瀬くんがパソコンに向かって真剣な表情で仕事をしている。

声をかけようかと思ったが、ジャマしてはいけない気がしてそのままフロアを後にする。

新WEBサイトオープンを控え、今がまさに正念場なのだ。

佐瀬くんナシでは、スムーズなサイト開設など為し得ない。

その時頭に浮かんだのは「寂しいけど、月曜にはまた顔を見れるんだし」という言葉だった。

自分が何を考えたかに気づいて驚く。

わたしは佐瀬くんの顔が見たいってこと？

「まーさか。8つも年下なんだし」

エレベーターにひとりで足を踏み入れて階下のボタンを押し、ブツブツとひとりごとを言う。

「ありえない。彼は弟みたいなもんで、そういう対象じゃないはず。第一、向こうがオバサンのわたしを女として意識するハズがない」

自分で結論を出しながら、ちょっと落ち込んだ。

結局そこなのだ。

向こうがこっちを恋愛対象外にするだろうという、のっけからの諦めモード。

ルックスも性格もよくてちゃんと仕事を持っている若い男性に感じる引け目は、年齢を重ねることに大きくなる。

29歳でこんな気持ちになってしまうなら、33歳になったときどうなんだろう。

もし、このままひとりで40歳になっちゃったなら？
リアルな想像にブルツと身震いが出た。

「あーあ。あのエゴイストの後を追っかければよかったかな。とりあえず、相手が見つからないから婚活してるわけだし、結婚しちやえばこつちのものって職業だし」

そういえば、香山セシルもアラサーだったはず。

あれだけの美貌と才能に恵まれてれば、アラサーどころかアラフォーでも焦ることなんて全然ないんだろうな。

むしろ、重ねる年齢がますます女を磨いていくのかも知れない。

帰りの電車で揺られて、ぼんやりとそんなことを考えていた。
週刊誌の中吊りポスターには、マリエちゃんが言っていたとおり、香山セシルとイケメン野球選手の、深夜密会スクープがある。

「ん？ 禁断愛？」

どうやら、不倫らしい。

確か、彼女の不倫は連続2回目だ。
どこまでも自由な恋愛感というか。

香山セシルは、その魔性のオナ的な存在感が注目的でもあり、同じくらいバッシングもされている。

どちらにせよ、その強い個性が多くの一との興味を引きつけるのだ。

ひとの持ち物に手を出さなくたって、彼女なら相手を選び放題だろうになあ。

駅に着き、自転車置き場に向かった。

月極の駐輪場から自転車を出し、バッグをかごに入れて夜の道を走る。

シンと静まりかえった通り。

夜風に髪がなびき、冷たい空気が頬を撫でていく。

深夜営業のスーパーの前にだけ、自転車がいくつか見えた。

毎日毎日、繰り返される日常。

これがずっと続くのかなと、切ない気持ちになることがある。電車を降りて、そこから誰もいない部屋に向かってペダルを漕いで。

暗い部屋をあけ、自分で明かりをつけ、冷蔵庫に何か食べるものがあつたか探す。

昔はそれでもいいと思っていた。

サークル仲間と毎日ワイワイやっていた学生の頃。

それから、ケンジと付き合って、同棲を始めた頃。

ひとりで過ごす時間も楽しいじゃない？　なんて。

マンションの前に着いたとき、猫がミャアと鳴く声が聞こえた。

ヨモギ色の小柄な猫が、自転車から降りるわたしの足もとにすり寄ってくる。

「あつ。昨日の子じゃない」

わたしは自転車を駐輪スペースに駐め、しゃがんで猫の顔を見た。

「今日はケーキ持ってないんだよ」

昨夜、市村くんをマンションへ入れようと四苦八苦していたとき、持っていたケーキを地面に落としてしまったのだ。

自分の部屋まで市村くんを連れていき、ケーキを取りに外へ出たら、白い箱の横に、お腹をすかせたこの子が座っていた。

寒いのに、帰る家がないんだろう。

そう思ったらなんだか哀想になり、わたしはマンションの外階段に座ってケーキの箱を開けたのだった。

「またケーキ欲しいの？」

猫が、ミャアと鳴く。

「あれはもう無いの。ケーキ、お前には美味しすぎたんだね。甘いものの味を知っちゃうと、忘れられなくなっちゃうよって昨日言っただじゃん……」

わたしもそうだ。

ケンジと過ごした幸せな日々を、今でも忘れられずにいる。

「待ってて。何か違う食べ物持ってくる」

わたしはヨモギ猫にそう言うと、部屋に向かった。

しかたない。わたしのバースデーヶ月前を、一緒に祝ってくれた子だもんね。

両側にいくつも部屋が並んだ暗い廊下を歩き、いつものようにドアの鍵を開けた。

明かりのついた清潔なキッチンが視界に飛び込んできて、慌ててドアを閉める。

「う、ごめんなさい！ 間違えましたっ！」

あたふたときびすを返してから、ピタツと足が止まった。

「……って、あれ？ ここ、わたしの部屋だよね」

部屋番号を確認したが、やはりそうだ。

「……？」

もう一度、恐る恐るドアを開ける。

「お帰りなさい。千絵里さん」

「……あなた、誰なの？」

狭い玄関に、ほっそりした男子が立っていた。

わたしがほとんど放置している生成のエプロンを細い腰に巻いて、まるで甲斐甲斐しい奥さんのように。

玄関に続くキッチンから、ものすごく美味しそうな煮物の匂いが漂ってくる。

「も、もしかして市村くん？」

恥ずかしそうに、彼が頷く。

一瞬、誰だかわからなかった。

昨日は7・3分けでピタリ撫でつけていた髪が、洗ってサラサラになっていたせいかもしれない。

その素直な髪とあっさりとしたパーツの小顔が意外に端整で、彼

を昨夜とは別人に見せたのだ。

「ど、どうして!？　なんでまだここにいるのよ!」

そのあとの言葉が続かない。

「あの。ごめんなさい、千絵里さん。僕、どうしても帰れない事情ができちゃったんです。それで、あのっ」

市村くんは、不安そうに両手をもみ絞り、すがるような目でわたしを見た。

寒空の中のヨモギ猫みたいに、頼りなく。

「帰れない事情……?」

ちょっと……!　どうしろっていつのよーッ!

08：スターリー・スカイ

「う、ごめんなさい！ 本当にごめんなさい！」

市村くんが、二つ折りになってしまいそうなほど深々と頭を下げる。

「僕、あんまり東京の街をしらなくて。なぜか財布も落としちゃってるし、他にどうしようもなくて」

「でも、携帯くらいは持つてるでしょ？ 家のひとに連絡取ったらいいじゃないの」

わたしは玄関に立ったまま、不測の事態に懸命に対処しようとしていた。

「あんたを銀座まで車で送ってくれようとしたおうちの方がいるんでしょう？」

「あの。それが。その」

市村くんは齒切れ悪くつぶやくと、うつむいた。

「帰れなくなった事情は話せないんです。でも、千絵里さんにすぐご迷惑を掛けることに、今さらですけど気づきました。すぐ出ていきますね」

言いながらエプロンを外し、お風呂のドアの前に掛けてあった緑

ジャケットを手取る。

「ち、ちょっと待ってよ。ほんとに家に帰れないの？」

「はい……」

消えてしまいたいような表情で頷く市村くんは、家出した高校生みたいに頼りなくて、どう見てもウソを言っているようには見えなかった。

「駅まで行かなくちゃタクシーも捕まらないよ？　ここ、どこだかわかる？」

わたしが聞くと、市村くんが恥ずかしそうに言った。

「すいません。わかりません」

「市村くんって、都内のひとじゃないの？　最近、地方から上京してきたの？」

市村くんが、小さな声で答える。

「いえ。１２歳からは都内です。ただ、家からほとんど出たことがなくて……」

ニートかい。

わたしは頭を抱えた。

こんな弱々しい子を、真夜中に外へ放り出せる？

「もういいよ。今晚は泊まってっていいから。でも、明日はだめだ

よ。わかるでしょ？ 昨日知り合ったばかりでよく知らない男子を、二晩連続で泊めるなんてほんとはありえないの」

「はい。わかります。ごめんなさい」

「謝ってばかりいなくていいよ。申し訳ない気持ちは伝わってるからさ」

わたしは後ろ手にドアを閉めると、靴を脱いで玄関に上がった。まわりを見渡して驚愕する。

これが今朝と同じキッチンだろうか！

見事に片づいている。

山積みだったゴミ袋はひとつもなく、もちろん、しなびた野菜の影もない。

お皿は全て洗い上げられ、シンクもピカピカ。

散らかったキッチンをきちんと整頓されてしまって恥ずかしいという気持ちはもちろんあったが、自分では到底たどり着けないほど片づいた部屋に感動すら覚えてしまった。

というか、このキッチンってこんなに居心地のいい空間だったの？

壁際でほとんど物置と化していた2人掛けのテーブルは本来の役割を果たし、手の込んだ家庭料理をいくつも乗せて誇らしげだ。

しかも、この料理の美味しそうなことったら！

「すごい。これ全部市村くんが？」

「あの。時間がありすぎちゃって、つい」

市村くんが焦ったように言う。

「でも、部屋は。千絵里さんのお部屋には入ってません。ほんとにここだけで」

いっそのこと、入ってくれたらよかったよ、市村くん。

そうしたら、今年の大掃除も多忙を言い訳にしないで済んだのに。

「ずっとここにいたなんて。キッチン、ヒーターないから寒かったでしょ？」

「でも、暖かかったです。片づけで身体動かしましたし、火を使って料理しましたから」

「外を自転車で走ってきたら、寒さで耳が千切れそうだったよ。今、ヒーターつけるね。まあ、ご想像の通りに散らかってる部屋だけど、ここを開け払わないとキッチンが暖かくななんないの」

キッチンとの仕切りになっている引き戸を開け、部屋に入って、いつも通り行方不明のリモコンを探す。

「あったあった」

今日はベッドの掛け布団の下にあった。

ついでに、取り込んだだけで畳んでいない洋服と下着を慌てて抱え、クローゼットに押し込む。

ジャケットを脱いで適当に掛け、キッチンで所在なさそうに立ったままの市村くんに声を掛けた。

「お腹すいたでしょ？ 遅くなっちゃってゴメン。仕事を立て込んで」

まるで、家で待っていた妻に言い訳する夫のようだ。

夫が見つからないならいつそヨメが欲しい、とよく冗談で言っていたわたしだが、この状況はまさにそんな感じだ。

「千絵里さん、和食は好きですか？ 肉じゃがを作りましたよ。茶碗蒸しもできたてです。白合えと、それに、茸の炊き込みご飯。大根はおみそ汁にして」

完璧。

なんて素晴らしい夕飯！

実家の母だって、一品や二品は総菜を紛れ込ませていた。

「わぁもう、超美味しそう！」

わたしはいそいそとキッチンのテーブルに座り、セッティングされた箸にまた感動した。

「この箸置き、折り紙？」

いずれ捨てようと隅に積んであった包装紙が、上品な一輪の花に変わっている。

「可愛い。市村くんって素敵なお嫁さんになれそう！」

口に出してからさすがにしまったと思った。

市村くんの顔を見ると、ちょっと考え込むような表情だ。

「そう思いますか？」

「ご、ごめんね。失礼なこと言っちゃって。わたしって、考えなしに言葉が先に出てきちゃうのよ」

「大丈夫です、気にしてません」

市村くんはそう言っただけに笑いかけると、「前に座ってもいいですか？」と、遠慮がちに聞いた。

「もちろん。一緒に食べようよ。市村くんが作ってくれたんだもん」

「けど、全部千絵里さんの冷蔵庫にあった食材ですし」

「座って座って。そこがスゴイよ。あの貧相な食材から、魔法みたいにこの料理」

市村くんが照れたように微笑み、わたしの前に腰掛けた。

白い肌に切れ長で黒目がちの瞳。
ん？ この顔、どこかで見たような。

わたしは少し前に身体を乗りだし、市村くんをじっと見つめた。

「ねえ。どこかで前に会ったことがある？」

市村くんが慌てて言う。

「いえ。き、昨日の食事会が初めてですよ！」

「だよねえ」

市村くんは、ほとんど家から出ないみたいだし。
だが、視線を逸らしたその顔。
うつむいた目元と、華奢な顎。

どこかでやっぱり見たことがある。

「あ、そうか。山嵐の一宮くんに似てるのか」

山嵐は、今人気絶頂の男性アイドルグループで、一宮くんはドラマに映画に大活躍のタレントだ。

「……えっと。時々、言われます……」

市村くんが気乗りしない様子でそう言ったので、わたしはあっさり引き下がった。

そんなことより、目の前のごちそうが冷めてしまっほうが重大問題だ。

「わたしも、香山セシルに似てるって、たまに言われるの。笑っちゃうでしょ？」

「あ、ほんとに似てますね。特に下向いたときとか」

「ははは。でも、お笑い女子芸人にも似てるって言われるしねえ。自分でもそっちの方だと思うわ。ご飯いただいていい？」

わたしが聞くと、市村くんが嬉しそうに顔を輝かせた。

「どうぞ。お代わりあります。いっぱい食べてくださいね」

「ありがとう。いただきますーす！」

料理は、最高だった。

シンプルな家庭料理が、こんなに美味しいと思ったことは初めて

だ。

味付けは優しくて、懐かしい。

空腹で縮んだ胃袋と、仕事で疲れた身体がほころんでいく。夢中で食べるわたしを、ニコニコ笑って見ている市村くん。空になった茶碗には、すぐにまた暖かいご飯がよそわれた。ほんのりと湯気を立てる食事が与えてくれる幸せといたら！

「この時間にこんなに食べたなら太っちゃう」

わたしがいうと、市村くんが笑った。

「千絵里さん、全然太ってなんかいませんよ。健康的で、生き生きしてて、すごく綺麗だと思います」

そう言うってから、耳を赤くして付け足す。

「あ、あの。へ、変な意味じゃありませんから……」

「ありがと。素直に受け取っとく。自分にどんどん自信が無くなる日々だから、元気づけに」

「どうして自信が無くなるんですか？」

市村くんが不思議そうに首をかしげた。

わたしはホッコリと煮えたジャガイモを飲み込んで答える。

「どうしてって。容姿だつていいとこ普通だし。アラサーだし。感性を要求される編集の仕事に、いつまで携わってられるかわかんないしね。このままひとりだったらどうしようって。自分に自信がないから婚活してんの」

それから、わたしを見つめる市村くに聞く。

「あんたはどうして婚活してんの？ まだ若いのに。それに、男のひとは結婚するなら……」

言いよどんだ言葉を市村くんが続ける。

「ですよ。僕、仕事もまだ一人前じゃないですし」

「市村くん、仕事はなんなの？」

「役者です」

「役者！？」

意外な答えに驚いた。

「劇団か何かに所属してるの？」

「ええ。そんなようなものです。でも、まだまだ先は長いです。僕はほんのひよっこで。人生経験も乏しいです。そこが、課題なんです」

家に引きこもりがちならそうだろう。

それにしても、印象と職業のギャップに驚いた。

市村くんは、わたしを見つめて聞いた。

「千絵里さん、仕事は楽しいですか？」

「ん？ うん。楽しいよ。WEB小説ってね、まだ歴史が浅いから。言い換えれば、自分の力で切り開いていける分野でもあるってこと。わたしには合ってる気がする」

市村君は、ニツコリと笑った。

「ですよ。昨日の食事で、そんな印象を受けました。僕、千絵里さんが紹介していたあの本を、読んでみようと思うんです」

へえ。男子が女子向けWEB小説ってめずらしい。

「じゃあ、貸してあげるよ。バッグの中に入ってるから」

「ありがとうございます。あ、お味噌汁のお代わりいかがですか？」

「もらう、もらう」

思いの外謎めいた市村君の言葉を考えようとした時、大事なことをハツと思い出した。

「そうだ。ヨモギ」

「ヨモギ？」

「マンションの外に猫がいるの。お腹がすいてるみたいだから、何か上げようと思って」

市村くんはすぐ立ち上がって、綺麗に整頓された冷蔵庫を開けた。

「鰹節がありますよ。冷凍ご飯を暖めて、猫まんまにしてあげましよう」

市村くんが手際よく作ってくれた猫まんまを持って、2人でマンションの外へ出た。

ヨモギ猫は、階段の三段目にチヨコンと座ってわたし達を見上げていた。

「遅くなってごめんね、ヨモギ。ほら、暖かいご飯持ってきたよ。今夜は寒いから、食べて暖まりなね」

階段に座り、夢中でご飯を食べる小さな頭を、そっと撫でる。市村くんが、後ろから懐かしそうに言った。

「昔住んでたうちにも、4匹猫がいたんですよ。いつの間にか住み着いて」

それから、猫をはさんで階段にしゃがみ、「千絵里さんは優しいですね」と言った。

「優しいのは市村くんだよ。だってきつとその猫たち、あんたがひろってきたんでしょ？」

頷いて微笑む市村くんのまなざしに、なぜか照れてしまう。
なんでこんなふうに見つめるのよ。
もしかしてわたし、赤くなってる？

コホンと咳払いして見上げた星空が、やけに綺麗に見えた。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
.

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9098z/>

婚活シンдрロームorz

2011年12月28日21時59分発行